ルカの福音書

―その神学的考察―

なぜルカは福音書を書く必要があったのか

ルカ独自の視点は何かを考察します。

空知太栄光キリスト教会牧師

銘形 秀則

目　次

1.　ルカの福音書に対する学びの視座　1

(1) ルカの問題意識
(2) イエスのバリア･フリー的宣教

2.　ローマの支配時代におけるユダヤ人のパラダイム形成　4

(1) イスラエルの歴史
(2) ユダヤ人のアイデンティティの危機

3.　イエス･キリストの生涯の区分　11

(1) 準備期間
(2) 公生涯の期間

4.　ルカの福音書の梗概と鍵語　15

(1) 梗　概
(2) 鍵　語

5.　四つの預言的賛美とその特徴　17

(1) なにゆえに預言的なのか
(2) 預言的賛美の根底に流れる神の「あわれみ」という概念

6.　富める者と貧しい者に対する関心　20

(1) ルカの福音書における「富める者」、「貧しい者」とは誰か
(2) ルカ固有のたとえの多くはお金の問題にかかわっている
(3) 富(マモン)によってもたらされる人間の普遍的危機

7.　ひとりのかけがえのなさ(個人の価値)　23

(1) ルカの福音書における個人の記述
(2) 聖書全体における「ひとり子」の意味するところ
(3) 御子という名、御父と御子の関係
(4) あなたは、御父と御子の愛の交わりの中に招かれている

8.　新しい時代の幕開けとしての聖霊 25

(1) イエスの生涯における聖霊の働き
(2) 聖霊による新しい時代の予告

9.　祈りの強調 27

(1) ルカの福音書独自のイエスの祈り
(2) 祈りについての教えールカ独自のー

10. イエスのたとえ話 34

(1) イエスのたとえ話における異質性
(2) ルカの福音書に記されているたとえ話のチャート

11. 真の弟子としての資格 38

(1) 弟子の道―キリスト道―への招き
(2) 弟子たち者の資格―弟子の道を妨げるものを通してー
(3) イエスの弟子づくりの方法

(1)ルカの福音書の神学的総括 41

(1) ルカの人間観
(2) ルカの神観(キリスト観)
(3) ルカの救済観

1．ルカの福音書に対する学びの視座

1．ルカの問題意識

(1) 執筆目的と時期

◆そもそもルカはなぜ福音書を書く必要があったのか(ルカは福音書だけでなく、使徒の働きも書いた)。ルカの福音書は、その序文に(１章１～４節)で明らかなように、ローマの高官と考えられるテオピロという人物に宛てて書かれている。しかしルカは彼一人のためにこの福音書を書いたわけではない。ルカはこれをローマ帝国の各地から集まっているギリシャ語を話す人々―すなわち、異邦人社会から救われた人々を励ます必要があったと思われる。

◆執筆時期は、紀元６１年～６３年の間に書かれたと思われる。

(2) ルカの問題意識

◆このころには、「教会はどの点から見ても異邦人の教会になっていた。・・・教会はいまや第二の世代を迎え、・・新しい回心者の情熱や献身的姿勢は失われつつあった。・・教会の信仰は少なくとも二つの点で試された。内部においては情熱が減少し、外部からはユダヤ人と異教徒の両方からの敵意と反対があった。さらに、異邦人キリスト者はアイデンティィの問題に直面していた。彼らは、次のように自問した。『私たちはいったい何者なのだろうか。私たちはユダヤ的過去とどんな関係があるのだろうか。特に、現在のユダヤ教の明らかな敵意を考える時、どうしたらよいのか。キリスト教は地上のイエスとどのような関係を持てばよいのだろうか。』・・・ルカは、キリスト者共同体がユダヤ人のみであった時から大多数が異邦人となった時に至るまでの時代の流れとその変化に伴う問題に、当時の誰にもまして気付いていた。」(デイヴィッド・ボッシュ著「宣教のパラダイム転換＜上＞」、東京ミッション研究所訳、新教出版社、1999 年 150 頁) こうした問題意識から、ルカは将来の異邦人宣教的課題を意識しながら福音書を書いたと考えられる。

(3) イエスのバリア・フリー[注1]的宣教・・・貧しい者との連帯と赦しの実践

(1) 当時の社会における様々なバリア(障壁)

① 指導者(祭司、パリサイ人、律法学者)とアム・ハーレツ(羊飼いたち)階級的バリア
② 富める者と貧しい者　経済的バリア
③ ユダヤ人とサマリヤ人(異邦人の中でも、特にサマリヤ人に対するユダヤ人の憎悪は強かった)　人種的・宗教的バリア
④ エルサレムとガリラヤ　地域的バリア

◆ルカの福音書においてイエスガ交わりを持った特定の種類の人々がいる。その最初に挙げられるのが貧しい人々である。さらに、女性を初めとして、取税人やサマリヤ人と交わりを持っていることが強調されている。ー社会的、宗教的障壁を乗り越えることは、当時の社会においては驚くべきことであった。ルカの福音書において、イエスのすべての活動とイエス

注1　1994 年、「ヒトに優しいモノ作り」をコンセプトに異業種間で結成されたＥ＆Ｃプロジェクト(Enjoyment & Creation)が、「バリア・フリー」という言葉を初めて世に出して大きな反響を得た。「バリア」とは、身体障害者、高齢者、妊産婦、けが人、病人そして子供たちの立場から見た生活環境上の「障壁や障害」を意味する。したがって、バリア・フリーとは「障壁、障害を取り払う」ということを意味する。今回、イエスの福音宣教を「バリア・フリー的宣教」としたのは、モノのバリアではなく、社会制度や文化や心のバリアを問題としたいからである。特に、私たちの「こころ」の中にあるバリアはなかなか取れない。口では「バリア･フリー」を叫びながら、心の中には強力なバリアを作っていることが多いのである。たとえば、「あの人よりも私はここが優れている。私をあの人と一緒にしてほしくない。あの人たちは私たちとは違う、特殊な人たちだ。」といった発想、見方。これがバリアである。

がこれらすべての人々およびその他の無視されていた人々と関係をもっていたことは、イエスが当時のバリア(障壁)を越えてあわれみを実践していたことを証しするものである。

(2) イエスのバリア・フリー的宣教を指し示す記述

①サマリヤ人、サマリヤの記述

◆ルカはサマリヤ人について何度か言及しているが、その中の少なくともいくつかは、非常に重要である。マルコはサマリヤ人やサマリヤについて何も言及していないし、マタイはイエスがサマリヤ人の町に入ることを禁止したことを記録しているだけである(10:1)。サマリヤ宣教は異邦人宣教の最初であり、神のご計画の一部であることを示すためであった。

◆ルカの中心部分、すなわちイエスのガリラヤからエルサレムへの記事(9:51～19:40)は、イエスがサマリヤ人と出会う記事(9:51～56)で始まっている。イエスは使いを送ってサマリヤの街に彼と弟子たちが泊まるところを用意させたが、町の住民は彼らが泊まることを拒絶した。ヤコブとヨハネは怒って、晩年のエリヤのように、天から火を呼び下してサマリヤ人の町を焼こうとしたが、イエスは二人の弟子を叱り、他の町へ行った。イエスの反応を理解するために、ここで心に留めておかなければならないことは、国粋主義的ユダヤ人にとって、サマリヤ人は異邦人よりも受け入れがたいということである。この態度は、サマリヤ人がユダヤ人の神殿を汚し、ユダヤ人の巡礼の人々を殺したことによる。それゆえ、ルカによる福音書を読んだユダヤ人は、ヤコブとヨハネの態度は十分に理解できるが、イエスの反応は理解できなかったに違いない。なぜなら、同胞が復讐の思いを抱くことをイエスガ否定したからである。

◆サマリヤ人について、ルカの次の言及、特に良きサマリヤ人のたとえ(10:25～37)はここで扱うテーマにとってさらに重要である。ユダヤ教の立場からするなら、サマリヤ人はユダヤ人の敵だけでなく、神の敵でもある。この記事の文脈の中では、サマリヤ人は否定的宗教価値しかないと思われている。彼は律法の成就からは最も離れており(これはイエスがこのたとえを語るきっかけになった問題である)、宗教的道徳的階級の底辺に位置しているのに対し、祭司やレビ人は頂点にいた。ユダヤ人はユダヤ人でない者から愛のわざを受けることが禁止されていたし、サマリヤ人が所有していた油やぶどう酒を買うことも許されていなかった。しかし、ユダヤ人の社会において、強盗に襲われている人にあわれみをかけるのは「人間」ではなく、「人間以下」の者であった。その彼が犠牲者に「祝福に満ちた友情」を示したのである。

◆ルカはサマリヤ人についてもう一つの出来事を述べている。それは重い皮膚病の患者の癒しである(17:11～17)。重い皮膚病の恐怖は、ここではユダヤ人とサマリヤ人の区別もなくしていた。この物語は１０人の重い皮膚病患者のうち９人はユダヤ人であり、一人はサマリヤ人であったことを示唆している。全員が祭司に自分を見せるために行ったが、イエスに感謝するために帰ってきたのは、サマリヤ人ただ一人であった。イエスが彼に言った。「行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直した(いやした、あるいは救った)のです」という言葉は、救いはこの軽蔑されていた人にも与えられたという事実を明らかに示すもうひとつの例である。

◆ルカは使徒の働きにおいて、復活した主は、エルサレムとユダヤの後に、サマリヤが福音の受け取り手となるであろうと告げた(使徒１章８節)。サマリヤ宣教は、伝統的なユダヤ的バリアからの決別を示唆するものであった。[注2]

注2 ◆ルカの福音書を注意深く読むなら、ルカはユダヤ人と彼らの宗教や文化に対して、非常に肯定的な態度をとっている事がわかる。ルカはイエスの教えと律法学者の教えとの相違を、他の福音書ほど強調していない。イエスはパリサイ人を批判しているが、マタイほど厳しくない。彼らは決して「偽善者」とか「盲目の手引き」とは呼ばれていない。ルカはイエスがパリサイ人の食事に招かれた三つの例を伸べている。しかもルカは論争的な記事(マルコ７章１～２０節のような)を除外しているが、それをユダヤ人が読んだならば、不快感を覚えるであろう。彼はマタイのように、毒麦のたとえを祭司長、パリサイ人に適用していない。ルカの受難物語においては、群衆は「その血の責任は、われわれと子孫にある」(マタイ２７章２５節)とは叫んでおらず、かえってルカは「大勢の民衆」がイエスのことで嘆いたり悲しんだりした(２３章２７節)と述べている。ルカだけが、十字架につけられたイエスが「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです」(23章34節)と祈ったと述べている。ルカはユダヤ人の指導者たちが無知のゆえに行なったということを、しばしば強調している(使徒３章１７節、１３章２７節参照)。

① 公生涯最初のナザレの出来事(ルカ４章１６～３０節)・＜復讐を克服されたイエス＞

わたしの上に主の御霊があられる。
主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。
主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。
しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。(4:18～19)

◆ここはイエスの公生涯全体の序文、あるいはこの福音書の物語全体の要約といわれている箇所である。なぜなら、ここにはイエスの活動全体の基本的特徴があらわされているからである。
◆ルカは聖書朗読のあと、イエスが語ったことをごくわずかしか告げていない。むしろ、彼はイエスの故郷ナザレにある会堂の会衆がいかに反応したのかに焦点を当てている。その反応から明らかなことは、イエスが彼らに敵対心を起こすような、拒絶されるような何かを語ったということである。
◆ルカ４章１６～２２節と４章２３～３０節の間の矛盾について、引用されたイザヤ書６１章が当時のユダヤ人にとってどのように理解されていたかたを見てみよう。イエスが引用したイザヤ書６１章は途中で終わっている。つまり「われわれの神の復讐の日を告げ」という部分の直前で終わってしまったのである。イエスは、メシアによるイスラエルの敵に対する復讐が来ることを預言していたが、このことばをはずされて、「主の恵みの年」のみを告げ知らせた。そのために「会堂にいるみなの目がイエスに注がれた」のである(ルカ４章２０節)。そして「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました」(２１節)と言った。これは当時の人々が待望していたメシヤとは全く異なっていた。それゆえ、人々はイエスを殺そうとしたのである。
◆イエスが復讐についての言及を除外しているのはナザレだけではない。このモチーフは、ルカの福音書の他の箇所にも見ることが出来る。例えば、ルカ７章２２～２３節。ここではバプテスマのヨハネに対するイエスの答えの中で、イエスはイザヤ書のいろいろな聖句を繋ぎ合わせて答えている。これらの箇所はなんらかの形において、神の復讐について言及されている(イザヤ35:4,29:20,61:2)。これはイエスが無意識にしたのではない。なぜなら、イエスは「わたしにつまずかない者は幸いです」(ルカ７章２３節)ということばを付け加えているからである。
◆ここで重要な事は、救いの時代は人々の期待とは異なっているということ、そして貧しい者、見捨てられた者、イスラエルの敵でさえも、神の憐れみが復讐を克服したという事実である。このことに「つまずかない者は幸い」である。
◆事実、イエスの逮捕、裁判、処刑を通じてのイエスの行動は、確固たる暴力否定の態度を強調している。ルカは、イエスが悪をもって悪に報いることを拒絶した人として理解していた。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分で分からないのです。」(２４章３４節) この十字架上の最初のことばは(ルカの独自のものであるが)、イエスがことばと行いにおいて、敵を愛することを教えたのである。

(3) イエスの与える「平和」(シャローム)

① 平和(シャローム)を作り出すこと

◆今日、現代世界において、テロ、暴力、犯罪、戦争、貧困が最も重要な問題となっている。しかもそれらは互いにしかも密接に関係している。まさにこのような現実の問題がルカの福

◆ルカは、イエスの幼児期物語においてイスラエルの重要性を強調している。異邦人のルカは、ここでイエスを何よりもまず古い契約の民の救い主であることを示している。マリヤの賛歌においてマリヤ「神はそのしもべイスラエルを受け入れて、あわれみをお忘れになりません. 私たちの先祖に言われたとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに」(１章５４～５５節)と言っている。ザカリヤの賛歌においても、同じ感情が表現されている。「ほめたたえよ、イスラエルの神を。主はその民を訪れて解放し、われらのために救いの角を、しもべダビデの家から起こされた。」そしてシメオンは「イスラエルの慰められるのを待ち望」(２章３８節)んでいた。彼は自分の目で「救い」を見る特権(２章３０節)と、「あなたの民イスラエルのほまれ」のゆえに神をほめたたえた。さらに女預言者アンナは、「エルサレムの救いを待ち望んでいる」人々に、幼子イエスのことを語った。

音書の焦点でもある。天軍賛歌の「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」（２章１４節）平和を作り出すことは、ルカ神学の重要な要素であり、教会の宣教の重要なメッセージである。使徒の働き１０章３６節にも「神がイエス・キリストによって平和を告げ知らせ」と記されている。イエスに従う者の心には復讐が入り込む余地はない。それは、イエスが自分を十字架につけた者のために祈った祈り（２３章３４節)の記事、また、殉教で死んでいくステパノの祈り(使徒７章６０節)にも反映している。

② 非暴力による平和

◆イエスの与える平和は、ローマ帝国の軍事力によって得る「平和」とは無関係である。悪に対する非暴力によって、愛によって作り出される平和、それこそ、この世における教会の果たすべき役割なのである。そのためには、私たちの様々な領域におけるバリアが取り払われることが必要である。しかもそのバリアを取り払って下さる方こそ、救い主イエスである。

2. ローマの支配時代におけるユダヤ人のパラダイム形成

—ユダヤ人のアイデンティティの危機を通して形成されたパラダイム—[注3]

<はじめに>

◆イエスを理解するためには、聖書の全般的な知識や霊的洞察だけでなく、歴史的認識が必要である。つまりイエスが生きていた時代をどう理解するかである。当時、イエスに対して投げかけられた問いが何であったのか、その時代背景やユダヤ人がある時代に培われた思想環境(パラダイム)がなんであったのかを正しく理解するのでなければ、イエスの答えを理解することはできない。これから、イエスの時代にイスラエルという国がどのような状況にあったか、また、当時の人々はどんな人たちであったかを見ることにしよう。というのも、それを知ることによって、今日の時代に生きる私たちにとっても重要なメッセージが見えてくるからである。

1. イスラエルの歴史

(1) 捕囚と帰還時代

◆北王国イスラエルの１０部族はBC772年にアッシリアの捕囚となり、サマリヤは異邦人の植民地となって「サマリヤ人」という共同体が形成されていった。南王国ユダもBC586年、エルサレムの神殿が破壊されてバビロンの捕囚となったが、BC539年バビロンはペルシアの王クロスによって倒される。クロスが捕囚の民に与えた故国帰還の許可（前538年）に促されて、ユダヤ人たちは総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアを先導として帰国した。

◆帰国した人々は、早速、神殿再建に着手し基礎を据えたが、周囲の住民の反対とペルシア王への訴状によって中断される。しかし預言者のハガイとゼカリヤの励ましにより、BC515年に第二神殿は再建された。それはソロモンの神殿が破壊されてからほぼ７０年後のことであった。しかし城壁の修復は妨害のため行われなかった。やがてBC458年に、律法学者であり祭司でもあったエズラがエルサレムに着き、律法を解き明かした（エズラ７章）。その１３年後のBC445年に、ネヘミヤが総督の権限を与えられて帰国し、５２日で城壁を修理し、エズラと協力して国内の政治改革と宗教改革を行い，厳格な律法遵守による神権政治を開始した。[注4]

注3 「パラダイム」とは、ある時代・民族・社会において、長い期間かかって培われた物事を認識する基本的態度、共通の大前提となっている思考・考え方・解釈の枠組みなどを包括的に表わした用語である。

注4 エズラの改革によって大祭司が国の頂点に立ち礼拝が規則正しく執行されるようになった。またエズラはシナゴーグ（会堂)礼拝を組織した。それにともない、律法を研究し、それを教える学者たちが台頭するようになった。後に、エ

(2) 中間時代・・混迷の時代

◆ペルシア帝国(BC536～BC332)がギリシアのアレキサンダー大王によって征服され（BC331年）、ギリシアの支配下に置かれるようになった時からローマ時代に移ってイエス・キリストが生れるまでの期間は、ユダヤ民族にとって内外共に試練の時であり、ヘレニズムの影響を受けた時代であった。[注5]　BC300年から前200年の間になされた注目すべきユダヤ人の作業の一つとして旧約聖書のギリシア語訳が挙げられる。[注6]　またBC200年からBC100年の間の出来事として、ユダ・マカベアの勝利（BC165年）とハスモン王朝の始まりがあり、「サドカイ派」「パリサイ派」「熱心党」などの発生によって新約時代へ舞台が備えられていった。

バビロン・ペルシャ時代

◆**BC586 年**のエルサレム破壊～**BC332 年**のアレキサンダー大王による世界征服(アッシリア、ペルシア、バビロン、エジプト、パレスチナ)まで。

ヘレニズム時代　Ⅰ

BC323～BC164

◆アレキサンダー大王の死後(BC323)、ギリシア帝国は四つに分割。パレスチナはエジプトのプトレマイオス王朝の支配下におかれる。その寛容政策により、ユダヤは神殿礼拝、および律法を中心とした自主的な宗教政策が許された。しかし一方で、ヘレニズム化が進み、ユダヤ教の内部でも伝統派とユダヤのヘレニズム化を促進するヘレニズム派との対立が激化するようになり、BC175 年には緊張の極みに達しつつあった。これによってユダヤ人は、ユダヤ人とは何かであるかというアイデンティティに関わる問題の問い直しを迫られ、同時に、自己の信仰を守るか、棄てるかという決断状況に立たされることになった。
◆**BC167 年**に、シリアの王アンティオコスは、ユダヤに対する徹底的な宗教弾圧を開始した。律法に従う生活が禁じられ、エルサレムの神殿にゼウス・オリンポスの祭儀を行なわせ、これに参加しない者や律法を守ろうとする者たちを処刑した。これはイスラエル・ユタヤ民族がそれまで歴史上経験したことのない最大の迫害であった。

ヘレニズム時代　Ⅱ

BC164～BC63 ハスモン王朝時代

◆この迫害に対して、ハスモン家に属するマタテヤガ立ち上がり、ユダヤの独立戦争が始まる。これが<マカベアの反乱>である。BC165 年、マタテヤの長子ユダの指揮の下にヘレニズム派の牙城であったエルサレムを奪還し、神殿を清めて以前の状態にした。この出来事は「宮きよめ」として、ユダヤ教における重要な年中行事の一つ「ハヌカ祭」

ズラは大会堂と呼ばれる議長となる。これは 120 人によって構成された組織であって、後、BC３世紀になってからこの組織はサンヘドリン(最高議会)が引き継ぐことになる。サンヘドリンは 70 人の議員によって構成され、その議長は大祭司であった。その構成員は、祭司たち、パリサイ主義者たち、長老たちからなっていた。このように大祭司は宗教的な役割だけでなく、政治的な役割も兼ね備えることとなった。しかしこのサンヘドリンも、AD70 年にエルサレムとともに崩壊することになる。

注5　ヘレニズムとは、ギリシャ人の文化・文明を意味する。その目的は「自己追求すること」(エロスともいう）である。どうすれば自分が生きるか、どうすれば自分を表現できるか、どうすれば自分が立派になれるか、それが彼らの文化、文明、芸術であった。アレキサンダーのやり方は、国を征服してそこにギリシャ人を植民し、自分たちの信じるヘレニズムというものを世界の隅々まで実現させることであった。ヘレニズムは今日でも、ヨーロッパ・アメリカ、そして日本にもその影響を与えている。

注6　アレキサンダー大王がアジア、アフリカ、ヨーロッパを征服したころ、植民地の国々にギリシャ語の使用を強制したことにより、地中海世界全体の共通語としてギリシャ語が一般化された。ちなみに、新約時代には、イスラエル地方ではアラム語が用いられていた。BC250 年頃に旧約聖書が 70 人の翻訳者でなされた事から、一般にギリシャ語訳の旧約聖書の事を７０人訳聖書（ローマ数字で７０を意味するＬＸＸと言う略号がよく用いられる。）と言われる。また、新約聖書もギリシャ語で書かれたことにより、メシア来臨のための時代環境が整えられることとなった。

の起源となった。これにより、ユダヤの独立時代(100 年間)を迎えた。実に、BC587 年のユダ王国滅亡後、約 450 年ぶりに独立国家として再生したのである。これ以後、BC30 年のローマによる征服までをハスモン王朝時代と呼ぶ。BC63 年、ローマの三頭時代(カエサル、クラッス、ポンペイウス)の一人、ポンペイウスが率いるローマ軍によってパレスチナは征服され、エルサレムは陥落。ポンペイウスは、エドム人(エソウの子孫)アンティパテルをユダヤの支配者に任命した。

ローマ時代

BC37～AD70 ヘロデの時代(ヘロデ大王 BC37～4、ヘロデ・アンティパス BC4～AD39－ガリラヤの領主、ヘロデ・アグリッパ AD48～70)

BC30 ローマ帝政が始まる。初代皇帝はアウグスト(BC30～AD14)、AD14～37 はテベリオ)

BC 4　イエスの誕生
AD31　イエスの公生涯
AD33　イエスの十字架と復活
AD70　〈エルサレム陥落〉キリスト教迫害の時代がはじまる

2. ユダヤ人のアイデンティティの危機

◆イスラエルを圧迫する国々は次々と入れ替わった。各国の軍隊が彼らの国土を蹂躙し、さまざまな帝国が支配権を主張した。ユダヤの民は異邦人に隷属していることを嘆くばかりだった。そして自らの手で自らを支配することを心から願った。「そしてそれはいつの日かメシヤが来て異邦人の諸国を征服して、イスラエルを回復するという期待となって拡大していく。この期待はイスラエルが世界を征服して、すべての国はイスラエルに服従するという幻想をもたらした。
◆ところで、ユダヤ人を飲み込もうとするローマの支配の危機に対して、ユダヤ人たちが自分たちのアイデンティティを守るために何らかの方策を取らなければならなかった。
◆ローマ支配は政治的・軍事的な帝国主義以上のものを表現していた。つまり文化上の帝国主義である。強力で異教的なヘレニズムという世界文化の帝国主義である。ユダヤ人の中には律法に縛り付けられる生活の厳しさに飽きている者たちもいたわけで、彼らにとってギリシャ・ローマ文明の価値観は、人に自由をもたらすものと見えた。そしてヘレニズムに嫌悪感をもっていたユダヤ人にとっても、ローマの文化には抵抗できないものと思われていた。
◆律法に忠実なユダヤ人は、この異教文化にならされてしまうことの危険をよく知っていた。人々の霊的状態はかなり低下しており、何世紀にもわたって預言者の現われない時代が続いていた。人々は飢饉を経験していた。霊の飢饉「主の言葉を聞くことのできぬ」飢饉である。そのような状況の中で、ユダヤ人としてのアイデンティティを守るためには何をすることができるか。どうすれば、彼らを飲み込もうとする「国々」の誘惑を防ぐことができるか。ほかのすべての者と同じようになるのを防ぐためには、どうすればいいのかを対処しなければならなかった。

① その対処の一つとして、「ほかの人々」とはだれかを厳密に決めるということをしたのである。ユダヤ人は非ユダヤ人を「国々」(異邦人)と呼び、人間として低く評価した。「世の国々」市民は偶像礼拝と不道徳の民であり、信頼できない人間であるとユダヤ人は確信した。彼らとの結婚はユダヤ人を汚染することになるのである。ユダヤの民は、自分たちと血のつながりを持つサマリヤ人をさえ異邦人(外国人)と見た(ルカ１７章１８節)。

② ユダヤ人はまた「バリア(壁)」を築いた。彼らと「ほかの国々」(サマリヤを含む)との間に、ユダヤ教の指導者は「頑丈な障壁」を築こうとしたのである。この壁は自分たちの国が生存するためにどうしても必要だとユダヤ人の指導者は考えた。ほかの国々とは違う国であることを主張することによってのみ、彼らは＜聖なる国＞となることができると考えた。そのようにして始めて、国家としてのアイデンティティを保ち、生活のすべての面で神をあがめることができると彼らは信じた。ユダヤ人は＜聖＞であることを通して、国家としての生存を求めようとしたのである。

3.　聖なる国へ至る道

◆しかし＜聖なる国＞となるためには、具体的にどんな方策を取るべきなのか。その点でユダヤの指導者の間に完全な一致はなかった。事実、イエスの時代には二つの主なアプローチがあった。ひとつは〔体制派の道〕であり、もうひとつは〔改革運動の道〕であった。

体制派	改革運動派
サドカイ派	改革派(熱心党)、エッセネ派、パリサイ派

(1) 体制派の道・・サドカイ派

◆アンナスやカヤパといった祭司たちの特権階級がこれに属する。また保守的な宗教グループであったサドカイ派のメンバーもこの中にはいる。サドカイ派は、口伝ではなく文字で書かれた律法の書だけを規範として守った。パリサイ派とは違って、ラビたちの解釈などは受け入れなかった、さらにこれもパリサイ派とは違う点であるが、肉体の復活というような比較的新しい神学概念[注7]には、サドカイ派は見向きもしなかった。
◆自分たちの国が直面している危機に対処するのに、体制派は独特のアプローチを採用した。彼らは社会に対する責任を重要視する現実主義者だった。サンヘドリンと呼ばれる最高法院(議会)を通して、ローマから許される限りの政治権力を、ユダヤ国家のために行使しようとした。たしかに、法と秩序の問題とか、徴税のことがらといった必要な場合は、彼らはローマと協力した。だがそれには彼らなりの理由があった。ユダヤ国家としての機能を最低限維持し、出来る限りの独立を勝ち取るため、というのである。さらに重要なことは、ユダヤ人の生活の宗教的な中心であったエルサレムの神殿礼拝を、何としても守らなければならないと彼らは考えたのである。ローマに対してできるだけ有利な交渉をする以外に、どんな道があっただろうか。何と言ってもローマは世界の超大国である。もしユダヤ人が反抗的であると分かれば、占領軍が「来て、われわれの神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」(ヨハネ１１章４８節)。 国の<聖>は神殿の礼拝を守ることによって最もよく維持される、というのが体制派の者たちの確信だった。そしてそのためには、現実的でなければならないし、妥協することも致し方ないと考えた。

(2) 改革運動の道・・改革派(熱心党)　エッセネ派　パリサイ派

◆もう一つのアプローチはユダヤ人の改革運動の道である。その道に属するのは改革派、エッセネ派、パリサイ派の三つである。彼らにとって体制派の立場は浅薄で無節操に見えた。
◆これら三つの改革運動には多くの共通点があった。彼らの時代の国家的危機に対処する方法として、彼らは律法を厳格に守るべきことを主張した。国家を改革するためには＜聖＞を中心に据えなければならない、というのがこの運動の立場である。＜聖＞とは分離を意味した。それは、けがれているすべてのものから離れることである。けがれは伝染しやすい。異邦人である占領軍と協力することは、儀式的なけがれを受けるばかりではなく、イスラエルの生き方を脅かすような文化の面の悪影響が流れ込んでいた。律法によれば、生活のすべての面で＜聖なる国＞であるべきであり、サドカイ派のように＜聖＞であることを目指す一つの特殊な場所である神殿を持つだけでは十分ではないと考えた。しかし国家としての＜聖＞という目標をどのように具体的に達成するかについては、彼らは一致できなかった。

a.　改革派

◆彼らは明確なアプローチを持っていた。それは異邦人の占領軍を追放することなしに、国家的な＜聖＞はあり得ない、というのが彼らの確信であった。ユダ・マカベアの革命の後１５０

注7　BC167 年のユダヤ民族の宗教的迫害によって、律法に厳格に従った伝統的な宗教生活を営もうとしたハシディーム(敬虔者)と呼ばれる多くの者たちが殺された。もしくは荒野への逃亡を余儀なくされた。このような逆境の中から、おそらくイスラエルで初めて明確な死者の復活の観念が生まれてきたことは、思想史的に見て極めて注目に値する。それは敬虔なる者の殉教という不条理を克服しようとする新しい信仰の芽生えであった。(山我哲雄・佐藤研共著「旧約新約聖書時代史―改訂版」(教文館、1997 年、139 頁)

年ほどの間に「律法に情熱を燃やす者、契約を固く守る者」のグループは、この戦略に沿って度々軍事行動を起こした。熱心党(ゼロテ党)は、紀元６６年にユダヤ戦争がはじまるまでは、組織的な政治運動ではなかった。しかしイエスの時代全体を通して流れていたひとつの傾向が、彼らによって表現されたと言える。それは常に民衆の支持を得ていた。

b. エッセネ派

◆第二の改革運動であるエッセネ派は、国家的〈聖〉を実現するために、熱心党と同じくらい明確な戦略を持っていた。それはこの世からの完全な分離である。異邦人や罪人と肩を接して生きる者はだれであろうと、律法が要求する〈聖〉を自分のものにすることはできない、と彼らは感じた。そこで彼ら「全き〈聖〉の民」は、パレスチナの騒がしい日常生活から逃れて、死海のほとりの人里はなれた地、クムランに理想的な共同体を建設したのである。その場所で彼らは、他の不信のユダヤ人とは違う生き方をしたのである。財産を共有にし、律法の全体(成文と口伝)を守ることに努力を傾けたのである。聖なる「残りの民」として生きることによって、自分たちはユダヤの国全体のために生きているのだと、エッセネ派は信じたのである。神の土地を汚している国々に対して、最終的に神が行動を起こすときが来るまで、神に忠実でありつづけることを彼らは目標としたのである。そして神が行動を起こされるそのときには、それまでの非暴力の立場を捨てて、〈聖〉を成就するための戦いに参加して戦うと考えていた。

c. パリサイ派

◆パリサイ派、これは革命派やエッセネ派よりもよく知られていた改革運動である。教義と実践面で、パリサイ派の人々は他の運動のメンバーと共通するものを多く持っていた。ユダヤ人の国が持つべき目標は、彼らにとっても＜聖＞がその中心であった。パリサイ派という名前を用いたのはそれなりの理由があった。それはアラム語の方言で「分離した者」という意味である。だがその目標を達成するのに、彼らは独自な道を取ることを主張した。社会の中にとどまりつつ、社会から分離するのである。社会に留まったままで、どのように〈聖〉であることを達成することができるのか。それには二つの方法が強調された。

◆一つは律法を守ることである。モーセ五書という「書かれた律法」だけではなく、(サドカイ派はこれだけを権威とした)、ラビによる解釈の口伝えのものも守らなければならなかった。これらの口伝による解釈は「昔の人の言い伝え」(マタイ１５章２節)は、書かれた律法のうち二つの面を特に強調した。一つには十分の一税が厳格に要求された。すべての収入は収穫の十分の一だけでなく、買ったもの、食べる物などあらゆるものの十分の一をささげなければならなかった。それらの品物を扱った者が正しくささげなかったかもしれないと恐れたからである。それに加えて、言い伝えによる解釈では、厳格な儀式上のきよめが要求された。けがれたものとの接触は一切禁じられた。実際にパリサイ派はそのメンバー(ほとんど平信徒)は、神殿の祭司と同じ＜聖＞の要求を守ることを期待したのである。たとえば、儀式として手を洗いきよめること、などである。

◆律法を厳しく守るというパリサイ派のこの要求のほかに、二つ目の要求が加えられた。彼らは接触する人々を限定しなければならなかった。「世の国々」「神なき異邦人」との接触を避けなければならなかった。彼らは、異邦人を自分たちとは根本的に違うものと見、人間としての価値を軽く見るようになったのである。

◆また彼らは、同じユダヤ人の中の律法を厳格に守らない人との接触によっても儀式的なけがれを受けると考えた。その人たちをパリサイ派は「罪人」と呼んだ。そしてこのような「律法を知らない群衆・・呪われている」(ヨハネ７章４９節)人々の数は当時、増える一方であった。この「罪人」たちが一世紀におけるパレスチナの人口の大部分を占めていたと思われる。[注8] 彼

注8　「罪人」とか「律法を知らない群集」は、アム・ハーレツ(地の民)と呼ばれる。バビロン捕囚後、この語は捕囚から帰還した民に対するユダヤ残留民を指すようになり（エズ4：4「地の民」）、その混血婚と異教主義への非難を含むようになった（エズ10：2，ネヘ10：30 - 31）。ラビ文学においてもアム・ハアレツは不道徳、不敬虔、律法に無知な一般大衆としてとらえられ、軽蔑の対象となっている。パリサイ人はこれらの人々が言い伝えを守らないので反感を持っており（マルコ7：1 - 5，ルカ11：38）、彼らの律法の無知をのろっている（ヨハネ7：49）。そしてガリラヤはそのような「地の民」の存在する中心地と考えられていた（マタ4：15）。しかしイエスは，この民と共に歩み，その友となられた（マタ9：13）。(新聖書辞典、いのちのことば社)

らが律法を守ることができなかったのには多くの理由があった。しかし主要な理由は経済的なものであった。すでに見たように、一世紀のユダヤ人が払わなければならなかった税(宗教的なものとローマ帝国へのもの)は膨大なものであった。その両方を払うことができたのは、豊かな人たちだけである。多くの貧しい人々は、強制的ではなかった宗教税の方を滞納することによって、何とか生き延びることができた。さらに、収入についてだけでなく、物を買うときにさえも十分の一税を払うということは、かなりの重荷だった、特に、生活が苦しくて土地を手離す危険に遭遇している人にとっては、つらいことであった。そういうわけで、一世紀の時代が進むにつれて、ますます多くのユダヤ人は、パリサイ派の基準から見るならば、明白な律法違反者となっていった。パリサイ派はその人々を非難した。そのような罪人との接触を避け、決して一緒に食事をしようとはしなかったのである。

〔参考図書〕
●アラン・クライダー著「<聖>をめざす旅」(棚瀬多喜雄訳、東京ミッション研究所、2000 年)
●山我哲雄・佐藤研共著「旧約新約聖書時代史―改訂版」(教文館、1997 年)

イエス誕生時におけるユダヤ人のパラダイム

サドカイ派

●体制派のグループ。特に、祭司たちの特権階級がこれに属した。彼らはサンヘドリンと呼ばれる最高法院を通して、ローマから許される限りの政治権力をユダヤ国家のために行使しようとした。
●またユダヤ人の宗教的生活の中心であったエルサレムの神殿礼拝を何としても守らなければならないと考えていた。そのためには現実的でなければならず、妥協することはやもえなかった。●彼らは口伝を除く、書かれた律法のみに従った。

改革派

●このグループにとっては、体制派の立場は浅薄で無節操に見えた。異邦人である占領軍と協力することは、儀式的なけがれを受けることに等しかった。また体制派のように神殿をもつことだけでは十分ではなかった。
●それゆえ異邦人の占領軍を追放しなければならない。熱心党はそうした考え方をもっていたグループである。それは常に民衆の支持を受けていた。

エッセネ派

●このグループは完全にこの世から分離し、死海のほとりの人里離れた地クムランに理想的な共同体を建設した。財産を共有し、律法の全体(書かれたものと口伝えのもの)を守ることに努力を傾けた。
●聖なる「残りの民」として生きながら、最終的に神が行動を起こす時が来るまで、神に忠実であり続けることを目標とした。そして神が行動を起こされる時には、それまでの非暴力の立場を捨てて、天の軍勢と共に戦いに参加するという考え方を持っていた。

聖

パリサイ派

●パリサイという名前はアラム語の方言で「分離した者」という意味である。その目標を達成するために、このグループは独自な道を取ることを主張した。それは社会の中に留まりつつ、社会から分離するという立場である。●社会に留まったままいかに神の聖を達成するかといえば、一つは律法を厳格に守ること(書かれた律法のみならず、口伝による解釈も含めて)によってであった。もう一つは接触する人々を限定することによって。つまり「世の人々」「神なき異邦人」のみならず、「律法を厳格に守らない人」との接触も絶たなければならなかった。

〔附記・適用〕

個人におけるパラダイム(防御的姿勢)とそこからの解放をめざすために

ニール・アンダーソン著『いやし・解放・勝利―キリストにあるアイデンティティの確立』
（マルコーシュ・パブリケーション、1996 年）
第１２章＜人間関係の拒絶に対処する＞参照

●イエスの時代において持っていたパラダイムは彼らの神の民としてのアイデンティティを失わせようとする危機的状況の中で形成されてきたものである。このことは、個人的なレベルでのパラダイム形成とその解放に光を与える。ニール・アンダーソンは『いやし・解放・勝利』の中で、人がこの世において生きる以上、なんらかの拒絶の痛みや圧力を受けていかなければならない。しかし問題は、その受ける拒絶に対して、どのように反応するかだとしている。もし拒絶された場合に、そこで受ける感情をもし肯定的に取り扱うことを学ばなければ、たとえクリスチャンとなっていた場合でも、その成長や成熟を阻む大きな妨げとなるということである。
●しかし残念ながら、多くの場合、私たちが拒絶に対して積極的なアプローチを取るかわりに、次の三つの防衛的な姿勢のいずれかを取ることを子供時代に学んでしまっているのである。家族、学校、社会全般で経験する拒絶に対して、常に、防衛的に反応するようになっているのである。しかし結論的に言えば、私たちが防衛的態度を取るならば、かえって拒絶を受けるという構造があるということである。防衛的態度は決して防衛にならないことを知らなければならない。私たちがこの構造から解放されるためには、神が私たちを決して拒絶されないということを実感的に経験しなければならないのである。

１．　三つの防衛的姿勢とその結果

(1) 勝ち残る戦いを通して受容されようとする姿勢

競争に勝つこと、あるいは人を出し抜くことによって、自分自身が「重要な人」になろうとする。結果的に、さらに大きな拒絶を招く。その能力は最終的には減少してしまうからである。感情面でも、感情表現の欠如、完全主義、不安・心配をもたらす。神に対しても、神の権威の下に入ることを拒否する。神との交わりにおいて親しさを感じない。

(2) 拒絶を受け入れてしまう姿勢

他の人に受け入れてもらおうと努力するが、自分は拒絶されて当然、愛される価値のない者だとどこかで受け入れている。自分自身を拒絶することで、他の人々からも拒絶される。感情面においては、劣等感、無気力、内省的性格、自己批判的になって落ち込む。神に対する態度と反応は、肉の父親の行動を神に投影し、神を信頼できない。

(3) 拒絶に対して反抗する姿勢

人の愛や親切は必要ないと言ったりする。そして人に対してしばしば嫌悪感をもたらすような行動や態度、服装をする。そのため、さらに多くの拒絶を経験する。また、他の人は彼が拒絶する社会構造を守ろうとする。感情面では、自分は生まれて来なければ良かったと思い、自己嫌悪感が強い。神に対しても、もう一人の暴君と見なして反抗する心が強い。

２．　防衛的に反応する必要はないこと、その理由

(答えは自分で出してみよう!)

3. イエス・キリストの生涯の区分

準備の期間（BC 4～AD 26）

1） 降誕・幼年時代・青年時代

（1） 降誕(ザカリヤへの告知、マリヤへの告知、イエスの誕生
（2） 御子イエスを取り巻く人々(羊飼い、シメオンとアンナ)
（3） ナザレにおける沈黙
（4） １２歳のイエス

2） 準備の最終段階

（1）バプテスマのヨハネの宣教
（2）イエスの受洗
（3）荒野における悪魔の誘惑

公生涯の期間（AD 27～30）

1） よく知られていない期間 （約１年）

●この期間、イエスはユダヤで過ごされた。しかしこの期間の記録は少ない。
（1）伝道開始の出来事
（2）初期ユダヤ伝道

2） 民衆の支持を受けられた期間 （１年数ヶ月）

●この期間、イエスはほとんどガリラヤで過ごされ、伝道された。イエスの存在は国中に知られるようになった。
（1）ガリラヤ伝道(前期)
（2）ガリラヤ伝道(中期)

3） 反対を受けられた期間 （約１年）

●このころイエスの人気は日毎に衰え、敵は増加し、その攻撃はいよいよ執拗さを増し加え、ついにイエスはその憎悪の犠牲となって十字架にかけられることになる。
●最期の年の６ヶ月はガリラヤで過ごされ、残りの６ヶ月はユダヤ、ペレアで過ごされ最期の一週間はエルサレムであった。
（1）ガリラヤ伝道(後期)・・はじめてキリストの受難と死と復活が予告される。
（2）後期ユダヤ伝道
（3）ペレヤ伝道

4） 苦難を受けられた期間 （一週間）

●エルサレムにおいて祭司長、律法学者、パリサイ人らの陰謀により処刑される。
（1）エルサレム入場 （2）宮きよめ （3） ユダの裏切り （4） 最後の晩餐
（5）裁判・十字架 （6）埋葬

5） 復活された期間 （４０日間）

●キリストが死から復活したことによって歴史におけるキリストの生涯は終わらない。キリストの御霊によって、教会を通して、その働きは今も継続されている。
（1）復活 （2）顕現 （3） 昇天

●以下、イエスの生涯における各時期の重要なポイントを取り上げてみたい。

(1) 準備期間 (BC4～AD26)

① 降誕・幼年時代・青年時代

◆この時期はまさに沈黙の時期である。イエスの生涯における３０年間はその大半が沈黙に包まれている。しかし、この時期において見過ごしてはならないのが「知恵」という表現である。ルカの福音書の２章には、この言葉が３度も記されている。

40 節「幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちて行った。神の恵みがその上にあった。」
47 節「聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。」
52 節「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人とに愛された。」

◆ここには、身体と心の成長のみならず、「人からも愛される」という社会性を身につけて行ったことが分かる。そしてさらに重要なことは、「知恵が満ちて」「知恵が進む」とルカは記している。これは、霊的な面において－御父との親しい交わりにおいて－成長したという意味である。そのために３０年という月日を要したのである。神との交わりの中に成長することは、多くの時間を必要とする。神はあわてることなく、じっくりと練られる方である。この準備期間によって、イエスの公生涯は、御父をアバ父として人々に啓示する土台が備えられたということが言える。

◆たとえば、イエスが１２歳の時、過越の祭のために両親とエルサレムに上られたときのことが２章 42～50 節に記されている。両親は迷子になったイエスを探し回って見つけた。そのときイエスは両親に「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」と言われた。両親はこのことばの意味が分からなかった。これは、イエスがいつも天の父と交わっていたことを示している。

◆イエスがベツレヘムで生まれ、飼葉桶に寝かせられたときから、エルサレムでの十字架の死に至るまで、御父の御腕の中に信頼する生涯を送られた。飼葉桶の中で、幼子イエスは御父のご計画の中で静かに眠っておられたし、公生涯の中では、弟子たちと共にガリラヤ湖の向こう岸に渡ろうとしたとき、激しい嵐が起こって舟が沈みそうになった時にも「イエスだけは、・・眠っておられた」(マルコ 4:38)。そこには嵐の中でも御父の御手にすべてをゆだねて、眠りの中で御父と交わっておられる姿をみることができる。そして十字架の上では、一時、神に見捨てられるという経験をする。しかしそれは最も暗い闇の中においても御父に絶対的な信頼を置く経験でもあった。そして最後には「父よ。わが霊を御手にゆだねます」(23:46)と言って息を引き取られた。

◆このように、御父に完全にゆだねられた３３年の生涯の中で、公生涯に至るまでの沈黙の３０年は、信頼の熟成期間として、とても重要な意義があるように思われる。ダビデやモーセ、そしてパウロにしても、こうした沈黙の準備期間が備えられたということは決して偶然ではない。

② 準備の最終段階・・受洗、荒野の誘惑

a. ＜受洗＞

◆イエスが公生涯に入られる前の最後の準備段階として、受洗と荒野の誘惑があげられる。イエスがなぜバプテスマを受ける必要があったのか。当時、バプテスマのヨハネという先駆者が現われ、ヨルダン川で悔い改めの洗礼を授けていた。そこにイエスが現われ、洗礼を受けられた。

◆洗礼を受ける理由をルカは記していない。しかし、マタイは洗礼を受ける理由を次のように記している。それは「すべての正しいことを実行する」(マタイ３章１５節)ためであった。この「正しいこと」とは何を意味するのか。第一の意味は、文字通り、生涯を通して神の義の道(御父との正しい関わりを通して、御父のみこころを成し遂げること)を意味する。第二の意味は、罪人である私たち人間と同一化するためである。自分の中に人類を取り込むこと、つまり、アダムのような集合的人格(代表=第二のアダム)となるためである。そのために、イエスはまず、罪人である私たちと同一になってそのさばきを受けなければならない。すなわち、罪人の運命を甘受することを意味する。具体的には、十字架の身代わりの死を予表している。

◆ルカは、イエスの受洗が、御父の御子に対する任職式であったことにのみ注目している。「・・イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。『あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。』」(ルカ３章２１～２２節)と。この天からの声は、私たちの

救いのために御子にその務めをゆだねられた御父の御子に対する信任の声である。そして聖霊も御子の上に下られた。公生涯における御子の地上のすべての営みは、御父も聖霊もかかわることなる。罪のゆえに神との交わりを失った人間との関係を再び回復されるために、御父も聖霊も御子を通して働かれようとしているのである。

b. ＜荒野の誘惑＞

◆御子イエスは受洗された後、御聖霊によって荒野に導かれた。その導きは御子イエスガ荒野で悪魔の誘惑を受けるためであった。それは御子が公生涯においてどこまでも御父に信頼する試練を潜り抜けるかどうかのテストであった。その具体的なテストの内容は三つある。

第一のテスト・・どこに自分の生存の保障をおくか(パンか、神のことばか)

◆人が罪を犯して以来、人は自分で田を耕し、労してパンを得なければならなくなった。パンは生存を保障する必要なものであるゆえに、この問題は切実である。人間はこのパンを得るために働き労していると言っても過言ではない。しかし、人間が真に人間性をもって生きるためには、パン以外に必要なものがある。それは神のことば、神との交わりの中で語られることばによってはじめて真に生かされる。パンを求めるあくせくした日々に明け暮れる人生から、神のことばによって支えられ、生かされる人生に生まれ変わることができるか、ひとえにイエスの生き方にかかっていた。イエスはそうした誘惑に対して「人はパンだけで生きるのではなく、神の口からでる一つ一つのことばによる」ということを、その生涯において実行された。また、弟子たちに朽ちる食物のためではなく、永遠のいちの至る食物のために働くように招いている。[注9]

第二のテスト・・人からの称賛か、それとも神からの称賛か

◆「神殿の頂から下に身を投げて、御使いの腕に抱きかかえられるところを見せない」という誘惑は、まさに、人々の注目を浴び、大きな称賛を勝ち得る何をして見せよというものである。人から認められたい、称賛されたいという欲求はいつの時代においても強い。特に、競争社会の中でそのためにすべてのエネルギーを注いでいる者も少なくない。人の歓心を自分に向けさせたいという思いが、自分を欺き、パフォーマンス指向のスタイルを生ませる。イエスはこうした誘惑を退け、徹底的に人に仕える道を選び取った。

第三のテスト・・人を支配することか、それともしもべとして仕えることか

◆イエスの受けた誘惑の第三は「私はこの世の国々とその栄華を、すべてあなたにあげよう」という人を支配する誘惑、権力への誘惑である。旧約における神の民の歴史、あるいはキリスト教会の歴史は、愛よりも権力、十字架よりは支配、導かれる者よりは導く者になりたいという誘惑にさらされた歴史だといえる。特にクリスチャンのリーダーシップは権力と支配によるものではなく、へりくだりのリーダーシップである。愛のためには権威を放棄することのできるリーダーシップである。しかも神の導くところならどこででも従う用意ができているほどに神を深く愛する人、神とともにあって、どこにあってもいのちを引き出すことのできる人である。イエス・キリストはまさにこのような人であった。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられた。・・・自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」(ピリピ２章６～８節)

(2) 公生涯の期間（AD26～30）

① よく知られていない期間（約１年）

◆ルカはこの時期について取り上げてはいない。この時期は、弟子のヨハネ、アンデレ、ペテロ、ピリポ、ナタナエルが弟子として召された。カナの婚礼(ヨハネ２章)、ニコデモとの会話の記事、サマリヤの女とサマリヤの人々の回心の記事がこの頃である。

② 民衆の支持を受けられた期間（約１年数ヶ月）

◆バプテスマのヨハネが投獄されてから、イエスはガリラヤで本格的な伝道を開始した。ルカはこの時から

注9 第二次大戦後、日本のキリスト教会には人々があふれた。アメリカからの食糧や衣類が無料でもらえたからである。しかし、世の中が安定し、暮し向きが楽になってくると、それらの人々はいつの間にか教会から遠ざかってしまった。「衣食足って礼節を知る」でなく、「衣食足って精神の貧しさ現わる」となった。イエス・キリストはそのことをよく見抜いておられた。ヨハネの福音書６章１～１５節、６０節、６６節参照。

記している。ガリラヤ伝道の主な活動の拠点はカペナウムである。イエスはおもにユダヤ人のために働いたが、ユダヤ人以外の者の間でも働かれた。イエスは多くの奇跡をなされた。

③ 反対を受けられた期間（約１年）

◆ピリポ・カイザリヤにおいて、イエスは「わたしをだれと言うか？」と弟子たちに質問する。この質問はイエスの生涯の前半の頂点であり、以後は、イエスが何のためにこの世に来られたかが語られていく。

図 1　イエスの宣教の舞台

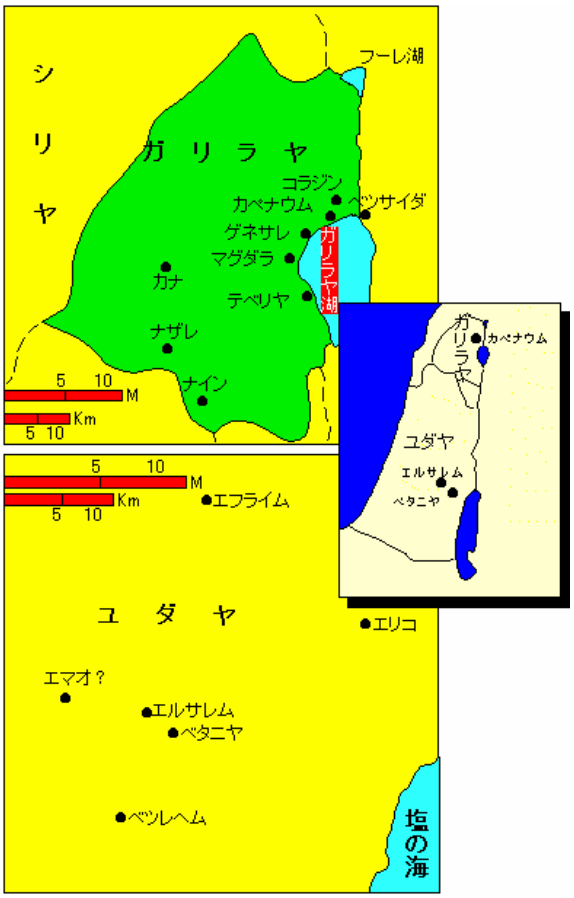
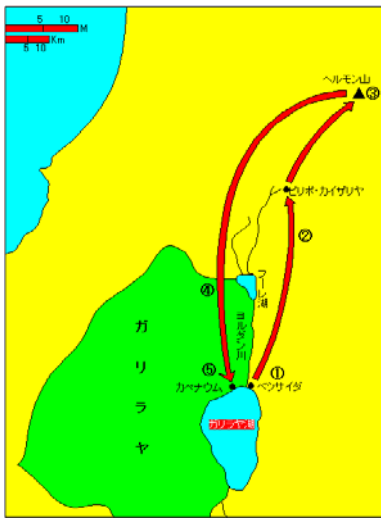


図 2　ピリポ・カイザリヤ



◆イエスとその弟子たちは、ピリポ・カイザリヤの周囲の地方に旅をした。イエスは、人々がご自身をだれと考えているかを、弟子たちに尋ねられた。ペテロは、イエスがメシヤであると信じる、と言った。イエスは、やがて訪れるご自身の死について弟子たちに話された。６日後に、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネを連れて高い山（おそらくヘルモン山であろう）に登り、そこで御姿を変えられた。その山のふもとで、イエスは少年から汚れた霊を追い出された。

---

(4) 共観福音書におけるイエス・キリストの生涯の構造について

マルコ　1：1 ～ 8：30	マルコ　8：31～
マタイ　1：1 ～16：20	マタイ　16：21～
ル　カ　1：1 ～ 9：21	ル　カ　9：22～
イエスとは誰か　⇒　ペテロの告白	イエスは何のために来られたのか ⇒ 受難と復活
●イエスの活動の中心はガリラヤであった。そこで多くの奇跡がなされた。人々はイエスの教えに驚いた。なぜならイエスが律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられていたからである。ここに知恵に満ちたイエスの姿がある。 ●イエスの評判は瞬く間に広がり、多くの民衆がイエスのもとに来た。	●受難と十字架の死と復活の予告 ●このときから、イエスは「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者はそれを救うのです。」と真の弟子を招かれる。 ●当時、ラビ(教師)と言われる人は、自分の弟子をつくることはなかった。ましてや招くことはなかった。

4. ルカの福音書の梗概と鍵語 注10

章	熊谷　徹（実用聖書注解）	鶴田　光子	フランシスコ会
1	序文　（1: 1～4）	序文　（1: 1～4）	序文　（1: 1～4）
2	メシヤの出現(1: 5～2 : 52)	神の子の到来(1 :5～ 2 :40)	洗礼者ヨハネとイエスの誕生
3	宣教への備え(3:1～4:13)	活動の準備（2:41～4:13）	～2:52)
4	ガリラヤ宣教 （4:14～9:50）	活動に対する反応 （4:14～6:11） 御心を継ぐ者の養成 （6:12～9:17） 救い主の十字架の予告 （9:18～9:50）	イエスの宣教前史 （3:1～4:13） ガリラヤにおける宣教 （4:14～9:50）
5			
6			
7			
8			
9			
10	エルサレムへの道 （9:51～19:27）	イエスの御国の教訓① ―神の国の弟子― （9:51～13:21） イエスの御国の教訓② ―神の国の性格― （13:22～17:19） イエスの御国の教訓③ ―神の国の到来― （17:20～19:27）	エルサレムへの旅 （9:51～19:27）
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19	エルサレムにて （19:28～21:38）	最後の週の活動 （19:28～21:38）	エルサレムにおける宣教 （19:28～21:38）
20			
21			
22	メシヤの死と復活 （22:1～24:53）	十字架（22:1～23:56） イエスの勝利(24:1～53)	受 難　（22:1～23:56） 復活と出現　（24:1～53）
23			
24			

注 10 ●この梗概から何が見えてくるだろうか。どの注解者もほぼその内容区分を同じくしている。イエスがガリラヤからエルサレムへの旅をはじめられる頃(9:51～)には、イエスに対する反対は強くなっていた。そのためイエスは民衆から次第に弟子たちに多くの時間を取るようになっていく。またこの部分には(9:51～19:27)、ルカ独自の教えやた

(2) 鍵語(キー・ワード)

Key Verse 「人の子は、失われた人を捜して救うためにきたのです。」(１９章１０節)

Key Word 「失われた人」(失われたもの、**The Lost**)

Main Theme 「失われたものを捜して救う解放者イエス」

●ルカの福音書の中心的テーマは「人間性を喪失しているものを解放して、本来の人間性を回復させ、未来(明日)を開かれるキリストが来られたことを告げ知らせること」である。
●『解放』『自由』はギリシア語では、ともに「アフェシス」である。そしてそれはナザレでの説教の直後に記される悪霊の追放が象徴するように、マモン、および罪からの解放をその最終到達点とし、解放されたものが新しい明日を開かれ、主の弟子となることを意味している。

Motivation 「神の憐れみ」(**1:50, 1:54, 1:58, 1:72, 1:78**)

●ルカの福音書１～２章は、神の憐れみのテーマに満ちている。このことは、福音書全体で６回用いられる「憐れみ」という名詞が、その箇所だけで５回用いられているという事実からもうかがえる。また、「憐れみ」ということば自体用いられていなくとも、さまざまな出来事が「憐れみ」のモチーフで展開されている。憐れみについては後程、再度、述べることにする。
●イエスの活動を貫く「憐れみ」は、単なる社会的次元にとどまらず、むしろ罪のもとにある人間をその悲惨から解放することを究極的な本質とする。その憐れみは、十字架の上での赦しの祈りにおいて完成する。イエスの弟子は世界に向けた神の「憐れみ」の証人となるのである。

①「失われた人」とはどのような者なのか ？

◆ルカ４章１８節はイザヤの預言(６１章１～２節)の引用である。この箇所には、「貧しい人々」「捕らわれ人」「盲人」「しいたげられている人」という表現が見られる。本来、豊かな者であったものが貧しくなっている。本来価値あるものが、価値あるものだと思っていない。そしてだれからも愛されないと思っている。自由の身だと思っていたが実は囚人であり、捕らわれの身となっている。自分は見えていると思っているが、実は盲目であり霊的な現実が見えないでいる。本来自由であるべきものがしいたげられ、抑圧されている。何もかも持っていると思っているが、実は大切なものは何も持っていないという現実。思い違いをしている。・・・・これこそ、人間らしさを失った人間の姿である。

②「失われた人」が救われるとはどのようなことなのか ？

◆「主の恵みの年」とは、ヨベルの年のことであり、本来的な(原初的な)状態に戻されることを意味する。ところで、ルカは神の救済的象徴である「食卓」「食事」「祝宴」の場面を数多く記述している(ルカの独自の記事として、7:36～50, 14:1～14, 15:1～2 を参照)。そしてこの「食事」は、いやしや罪の赦しと結び合わされている。また同時に、イエスによる救いを拒否する敵対者の存在をもその食事の席で浮かび上がらせる。
◆救済的意味をもつ一連の「食事」は、最後の晩餐とそこでの「新しい契約」(22:20)へと収斂する。イエスの受難、死、復活、昇天を通して締結されるこの「新しい契約」は、神のイスラエルのみならず、人類全体との和解を実現し、「食事」の意味、つまり神の交わりを完成する。[注11] 主の食卓(祝宴)にあずかることが神のあわれみによる救いといえる。他の聖書の箇所から「食事(食卓)」のもつ意味を考えてみよう。ヨハネ２１章、黙示録３章参照。

とえ話が多く存在している。

注11 フランシスコ会聖書研究所訳注「ルカによる福音書」改訂新版、解説の項を参照。

5. 四つの預言的賛美とその特徴

(1) なにゆえに預言的なのか

◆預言的賛美とは、これからイエスによってなされることが、すでになされてしまったかのように記されているからである。つまり、未来形としてばなしに、全部成就した過去形で語られている。完成から祈りと賛美が始まっているのである。しかも、そうした内容は人々に喜びと希望を与えるものである。
◆四つの預言的賛美は、すべて歌われたものではなく、語られた賛美である。

a. マリヤの賛歌（マグニフィカート）

1:46 マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、
47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。
48 主はこの卑しいはしためにに目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。
49 力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、
50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。
51 主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、
52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、
53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。
54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。
55 私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」

●「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます」(1:35)と御使いに語られたマリヤの賛歌は、純粋な賛美といえる。願いごとはなく、神がマリヤのためにしてくださった神のあわれみのわざに対する賛美だけがしるされている。そのあわれみはマリヤのみならず、すべての時代において「主を恐れかしこむ者」の上に注がれるのである。その意味においてこの賛歌は預言的である。
●主の来臨による三つの変化
①心の思いの高ぶった者を追い散らすという変化。
②権力のある者を王座から引き下ろし、卑しい者を引き上げるという変化
③飢えている者を良いもので満たし、富んでいるものを空腹のまま帰らせるという変化
神の支配するところには逆転の恵みが見られるのである。

b. ザカリヤの賛歌（ベネディクトゥス）

67 さて父ザカリヤは、聖霊に満たされて、預言して言った。
68 「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を顧みて、贖いをなし、
69 救いの角を、われらのために、しもべダビデの家に立てられた。
70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話してくださったとおりに。
71 この救いはわれらの敵からの、すべてわれらを憎む者の手からの救いである。
72 主はわれらの父祖たちにあわれみを施し、その聖なる契約を、
73 われらの父アブラハムに誓われた誓いを覚えて、
74 われらを敵の手から救い出し、
75 われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。
76 幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう。主の御前に先立って行き、その

道を備え、
77 神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。
78 これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ、
79 暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く。」

●この預言の特徴の第一は、「顧みて」「贖いをなし」「立てられた」とあるように、救いにおける神の主権である。すべてのことが神からはじまり、神により、神へと至るという事実に目を向けさせようとしている。
●第二の特徴は、この救いはわれらの敵からの解放であることである。敵とは、神による救いを妨げるサタンとその勢力全般を指すと考えられる。また、1:77 では、救いは「罪の赦し」というより根源的なものへと言い換えられている。
●第三の特徴は、救いの目的が生涯のすべての日において「主の御前に仕えること」、すなわち神への真の礼拝者となることである。

c. 天軍賛歌（グロリア・イン・エクシェルシス）

2:13 すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。
14 「いと高き所に、栄光が、神にあるように。
地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」

●イエス誕生の告知が主の御使いによって羊飼いたちに与えられるや否や、天に賛美の大コーラスが響きわたった。　その賛美の理由は二つある。一つは天において啓示された神の栄光のゆえに、もう一つは地上における神のわざのゆえに、である。
●御使いたちの務めは神の使信の伝達と神を賛美することである。天において多くの御使いは大声で「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です」(黙示 5:12)と賛美している。
●「平和」とは、イエスが罪からの解放によって成就する完全な救いを意味する。共観福音書において「平和」という語はルカで最も頻繁に使われている(13回)。ザカリヤの賛歌にも、シメオンの賛歌にも登場する。

d. シメオンの賛歌（ヌンク・デュミティス）

2:28 すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。
29 「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。
30 私の目があなたの御救いを見たからです。
31 御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、
32 異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。」
34 また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。
35 「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れまた、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。
36 剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現われるためです。」

●シメオンが聖霊に満たされて歌った(語った)預言的賛美。ここには二つの預言的な内容がある。
●第一の預言は「救いの普遍性」ということである。神の救いは神の民イスラエルのみならず、異邦人に対しても備えられた啓示の光であった。これは当時のユダヤ人には想像

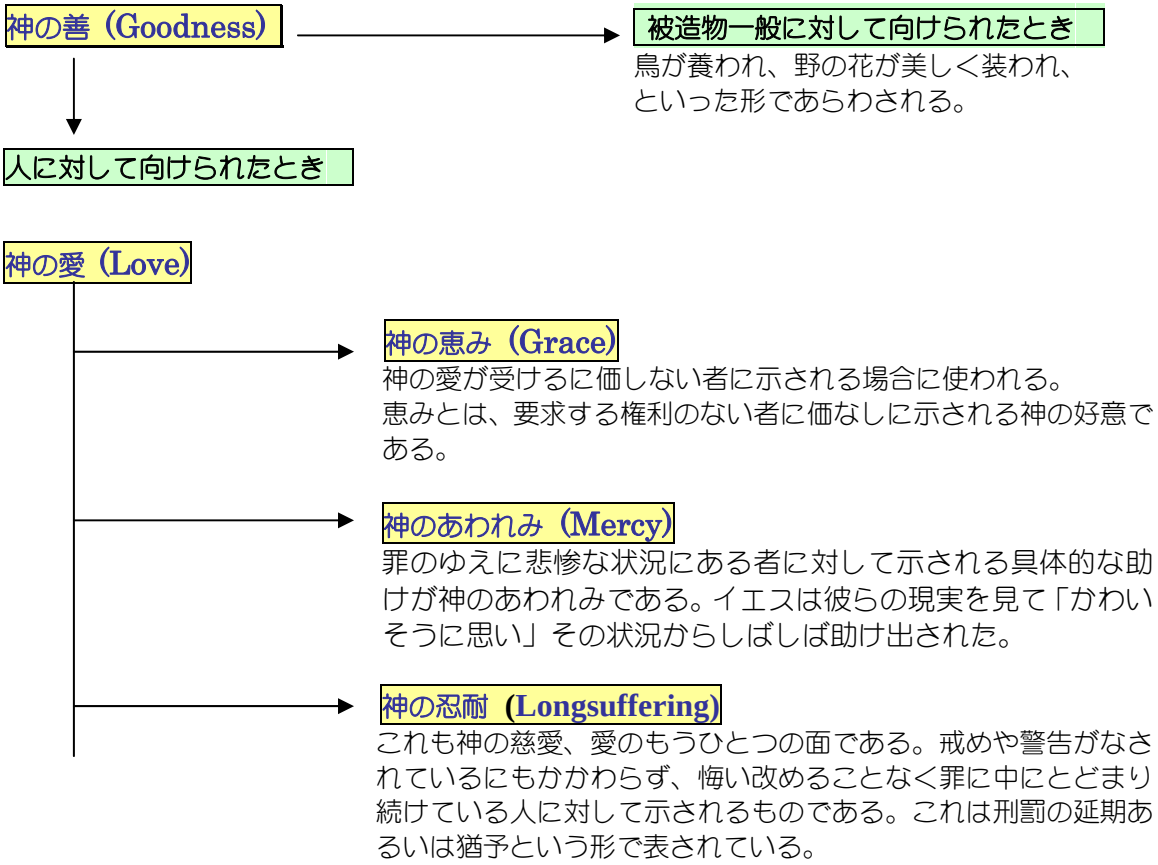
だにできないことであり、しかも受け入れがたいことであった。

●第二の預言は「イエスが多くの人々の反抗のしるしとなる」ということである。事実、イエスは神の民によって憎まれ、疎外され、殺された。なぜ、そのような反抗を受けたのか。それは「多くの人の心の思いが表わされた」からである。人はこのイエスに対する態度によって「倒れ」もし、「立ち上がり」もする。正にこのイエスは人生の試金石である。聖書は「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石。尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることはない」（Ｉペテロ２章６節）。主イエスこそ私たちの唯一の望みである。

(2) 預言的賛美の根底に流れる神の「あわれみ」という概念

①神の道徳的属性として「神の善」(**Goodness**)がある。神の善は、一般的に「神の慈愛」(いつくしみ)と訳されている。この場合、神の慈愛(いつくしみ)という概念は総称的な概念であり、それは以下のようにその対象の性質や状態によって異なっている。

〔新キリスト教辞典「神の属性」の項参照〕



②神のあわれみとは、窮状にある人々に対する同情だけでなく、具体的行動が伴った神の真実な愛である。主イエスは、病人や悪霊につかれた者、取税人、罪人などを見てあわれまれ、かわいそうに思われた。またあわれみを求める人々の声に耳を傾けられ、彼らをいやし、助けられた。そしてこのキリストのあわれみのきわみは、十字架の贖いの死において最も明らかに示されている。そして神はご自分のあわれみを示すことによって、人もまたあわれみ深くあることを求めておられる。ルカ６章３６節参照。

神のあわれみ　＝　同　情　＋　具体的行動

② 神のあわれみと関連して、新約聖書の出来事において「かわいそうに思い」と訳されていることばがある。それはギリシャ語でスプラングニゾマイ(σπλαγχνιζομαι)である。以下の箇所をチェックしてみよう。そしてこのことばが出てきたあとに、どんなことが起こっているかをチャートまとめてみよう。ルカ福音書７章１３節、１０章３３節、１５章２０節。マタイ福音書９章３６節、１５章３２節、１８章２７節、２０章３４節。

以下のチャートを完成させよう。

聖書箇所	主　体	対　象	状　況	結　果
ルカ　７章１３節				
１０章３３節				
１５章２０節				
マタイ９章３６節				
１５章３２節				
１８章２７節				
２０章３４節				

6.　富める者と貧しい者に対する関心

(1) ルカの福音書における「富める者」「貧しい者」とは誰か

◆ルカの語っている貧しい者(プトーコス)とはだれを指しているのか。イエスガナザレで公に語った最初のことば(ルカ４章１８～１９節)には、貧しい者の運命を逆転するという福音が語られている。「捕らわれ人」「盲人」「しいたげられている人々(圧迫されて傷ついた人々)」は、すべて「貧しい人々」に含められている。それらはみな貧しさの現われであり、すべて「福音」を必要としている。「貧しい者」とは、しばしば不利な立場に置かれている人々すべてを指す集合的なことばである。ルカにとって貧しい者とは、社会的カテゴリーである。[注12]

注12　ディヴィッド・ボッシュ著『宣教のパラダイム転換＜上＞』(新教出版社、170～176 頁参照)。174～175 頁にかけて、次のように記されている。「ルカ４章１８～１９節はイザヤ書６１章１～２節からの引用である。これはまずバビロン捕囚直後の失望したユダヤ人にまず語られたものである。ここで注目すべきことは、ルカは、イザヤ書６１章１節と２節の間に、イザヤ書５８章６節の『しいたげられている者たちを自由の身とし』ということばを挿入している。これはルカが意図的に挿入したものである。『しいたげられた者たちを自由の身とし』という句は、明らかに社会的な面を示している。というのも、イザヤ書５８章６節は、富める者が貧しい者を搾取するという社会的矛盾を批判している文脈に置かれているからである。富める者は断食の日にさえ、自分の好むことをし、労働者を圧迫している(３節)。そのような中で預言者は『わたしの好む断食は、これではないか。悪のきずなを解き、くびきのなわめをほどき、しいたげられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。飢えた者にはあなたのパンを与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見て、これに着せ、あなたの肉親を世話することではないか・・・』と語る。このように『しいたげられた人』とは、経済的に破綻した者、奴隷になった者、貧困の束縛から逃れる希望のない者を指す。そしてそれは、ヨベルの年、あるいは『主の恵みの年』のみが、彼らにその悲惨から逃れる道をもたらすことができるのである。」

◆逆に、「富める者」(プルーシオス)とは、貪欲な者、貧しい者を搾取する者、金儲けに夢中になり、宴会の招待をも断ってしまう者(ルカ１４章８～９節)、ラザロが門のところにいても気がつかない者(１６章２０節)、快楽的な生き方をしており、それゆえに富への心使いによって心が閉ざされてしまう者(８章１４節)である。また、マモン(富)の奴隷であり、崇拝者である。また、彼らは、傲慢で、力を持ち、それを乱用する。とりわけ彼らは不敬虔であり、この世のことに夢中であるため、「神の前に富まない者」(１２章２１節)、あるいは「神の目には貧乏人」である。ルカ６章２４～２５節は、「富んでいる者」に対する呪いのことばである。

	聖書箇所	たとえ話	ルカ特有●印
1	７章４１節～５０節	二人の債務者	●
2	１２章１３節～２１節	愚かな金持ち	●
3	１４章２８節～３０節	塔を築こうとする者	●
4	１５章　８節～１０節	失われた銀貨	●
5	１６章　１節～１３節	不正な管理人	●
6	１６章１９節～３１節	金持ちとラザロ	●
7	１８章１８節～２５節	金持ちの役人	
8	１９章　１節～１０節	ザアカイ	●
9	２１章　１節～　４節	レプタ二枚をささげた貧しいやもめ	

◆「貧しい者」「富める者」－この二つの世界は固いバリア(障壁)によって分けられており、富める者は貧しい者を軽蔑し、貧しい者たちは悲しみの中に自らを閉じ込めてしまいがちであった。

(2) ルカ固有のたとえの多くはお金の問題にかかわっている

◆以上のように、ルカ固有のたとえの多くはお金の問題にかかわっている。また、６章２０節、２４節では貧しい者への祝福と富む者へののろいが対照されている。イエスは貧しい人々に福音を伝えるよう遣わされた（４章１８節、７章２２節）。御使いたちがキリストの誕生を最初に知らせた羊飼いたちも貧しい人々であった（２章８節以下）。祝宴を催す時、金持ちや友人、親族ではなく、「貧しい人、不具の人、足なえ、盲人たち」を招くようにという指示まで与えられている（１４章１２節～１４節。２１節）。マリヤもその賛美で「飢えた者を良いもので満ち足らせ」と歌っている（１章５３節）。ルカの描くイエスは、常に、貧しい者と共にいるのである。
◆イエスのたとえは、富や財産そのものに向けられたのでなく、そこから生じる危険と、それらによって危険にさらされている人々に向けられている。愚かな金持ちのたとえは、富により頼む金持ちの心理を見事に描写している。金持ちの役人はイエスのもとを去って行った（１８章１８節以下）。それに対し、財産を放棄したザアカイの姿を見て、イエスは「きょう，救いがこの家に来ました」と語っている（１９章８～９節）。また、神に対し最も多くささげたのは、金持ちではなく貧しいやもめであった（２１章１～４節）。

(3)　富(マモン)によってもたらされる人間の普遍的危機

◆イエスはルカ１２章３３節で「朽ちることのない宝を天に積み上げなさい」と言われた。宝とは、その人にとって価値ありとするもの、依存の対象、関心の的、満足を与えるものである。人はだれでも、例外なしに、有形無形の宝を持っているものである。「あなたの宝のあるところに、あなたの心がある。」(３４節)とあるように、その宝がその人の心であり、その人の生きる目的に

なってくる。
◆自分のために宝を持つことが悪いことだと、イエスは言っておられない。むしろ宝なしに人間は生きられないのである。それを見出そう、得ようとすることが、生きることの原動力となる。大切なことはイエスがその宝を地上にたくわえること(見出すこと、求めること)を警告されているのである。「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい」なぜなら、そこでは虫とさびで、きず物となり、また盗人が穴をあけて盗むからである。
◆地上の宝とは、具体的に、子ども、夫、妻、親、尊敬する人物、健康、安定した生活、自分の才能、能力、技能、仕事、所有物、ある経験・・等。このような地上の宝はいつも失う危険をはらんでいる。いつ失うかわからないために、どこかに喪失の不安を抱えて生きている。だからその不安ゆえに、依存する対象にますます執着するようになる。貪欲になる。自分の宝を地上のものに見出そうと私たちがもがくことは、つまりそれらのものに信頼を置くならば、究極的には幻想の運命に終わることを、イエスは警告しているのである。この世のものはみな恒久性がない。やがてはみな朽ち果て、失われるのである。
◆富それ自体は罪ではない。神からの与えられたものであり、正しく管理しなければならない。しかし、富に対する私たちの態度が危険なのである。罪は富を用いて私たちのうちに貪りを引き起こす。私たちの目をくらませ、判断を狂わせ、私たちの生活を支配してしまう。力をもって、私たちを引きずっていく。主は、そのことをよく考えるように私たちに迫っておられるのである。「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということばできません。」(ルカ１２章１３節)。
◆富は私たちの思いと行動を束縛する強い力を持っている。それは全人格を捕らえる力を持つものである。そして私たちを神から引き離すすさまじい威力なのである。富は人間の考え方に３つの影響を及ぼす。

① 富は、誤った独立心を助長する。この世に物質的に恵まれている人はお金さえあれば何でも手に入る。何か困ってもお金さえあれば解決がつくと考えている。
② 富は、人をこの世に縛り付けてしまう。望むものがすべて世にある者は、来たるべき世に、天におけるものに何の興味も示さなくなる。見えるものだけに心を奪われ、見えないものの価値が薄れる。
③ 富は、人を利己主義にする。貪欲、物欲はどんなに多くもっていても満足はしない。一度、安楽でぜいたくを味わうとそれを失うことを恐れ、失われまいといつも緊張し、心配が耐えない。そして他人に分け与えるよりもいっそう富に執着するようになる。

●例話・・・〔ひとりの農夫の話〕
ある日、その農夫がニコニコと喜びながら帰ってきた。というのは、一番いい牛が二頭の子牛を産んだのであった。一頭は赤い牛、もう一頭は白い牛だということを奥さんや家族に知らせた。彼は「そのとき、急に時期が来たら一頭を売ってその売上金はうちに、もう一頭分は主の働きのためにささげよう」と言った。すると奥さんは「どちらをささげるつもりか」と尋ねられ、すると彼は言った。「そんなことは今心配しなくてもよい、時期が来るまで両方とも同じように育てよう。」と。
それから数ヵ月後、男はなんとも哀れな、悲しい顔つきをして帰ってきた。彼の奥さんが「何か心配事でもあるのですか」と聞くと、「悪い知らせだ。主にささげた牛が死んでしまった」。・・奥さんは「でも、この前、どちらを主の牛とするかお決めになりませんでしたよ」と言ったが、彼は「いや、白いやつにしようとずっと決めていたんだ。そしてその白いやつが死んでしまった。主の牛が死んだんだ」と。

◆果たしてこの話を笑うことができるだろうか。死ぬのはいつも主の牛なのである。ふところ具合が淋しくなると、まず先に削られるのは主のものなのである。
◆神と自分との間に「モノ」(富、お金、財産)が入ってくるとき、むさぼりになる。むさぼりとは偶像礼拝である。富はこのようにすさまじい力をもって私たちを捕らえ、支配してしまうデーモン的な力である。私たちはこの誘惑に自分の力で勝つことはできない。
◆イエスは、金持ちが天国に入ることは、らくだが針の穴を通る以上に難しいと言われた。それは富のもつデーモン的な力のゆえである。しかし金持ちは決して天国に入れないと言われたので

ない。人にはできないが、神にはできるのである。たとえば、ザアカイがそうである。彼はイエスと出会ってから天に宝を見出した。ルカの福音書はまさに富める者に呼びかけているのである。

7. ひとりのかけがえのなさ、個人の価値

◆ルカの福音書における特徴の一つに、「ひとりひとり」「ひとり息子」「ひとり娘」「ひとりの罪人」といった独自の表現がみられる。個人のかけがえのなさをルカは強調している。

(1) ルカの福音書における記事

聖書箇所	記　　事
4:40	日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人たちがみな、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた。
7:12	イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかつぎ出されたところであった。町の人たちが大ぜいその母親につき添っていた。
8:42	彼には十二歳ぐらいのひとり娘がいて、死にかけていたのである。イエスがお出かけになると、群衆がみもとに押し迫って来た。
9:38	すると、群衆の中から、ひとりの人が叫んで言った。「先生。お願いです。息子を見てやってください。ひとり息子です。
15:4	「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。
15:8	また、女の人が銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか。
15:7	あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。
15:10	あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。

◆ナインの町のやもめの「ひとり息子」（ルカ7章12節）、ヤイロの「ひとり娘」（ルカ8章42節）、そして悪霊につかれた「ひとり息子」（ルカ9章38節）という表現が用いられており，3箇所いずれも，かけがえのない子供に対する親の深い愛情が表されている。ルカがあえて「ひとりひとり」「ひとり息子」「ひとり娘」「ひとりの罪人」と表現したその意図するところは何なのか。
◆いなくなった一匹の羊、なくした一枚の銀貨はそれぞれ失われたひとりの罪人を指しているが、そうした者に対する神の異常とも思える愛とは何か。

(2) 聖書全体における「ひとり子」の意味するところ

◆聖書において、「ひとり子」という表現は非常に大きな意味をもっている。創世記２２章をみよう。そこにはアブラハムの生涯における最大の試練が記されている。

- 「そこで神は仰せられた。『あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。』（２節）
- また、御使いは仰せられた。『あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。』（１２節）
- 神はアブラハムを呼んで仰せられた。『これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓

う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。・・』（１６、１７節）。

◆イサクは実際にはアブラハムのひとり息子ではなかった。しかし彼は、神の約束によってアブラハムに与えられた唯一の子、「愛され、選ばれた子」であったのである。父アブラハムがその愛するひとり子を惜しみなく神にささげるという心の痛みを、神は覚えられた。やがてその痛みは神ご自身の十字架の痛みとなった。⇒ヨハネ３章１６節。

◆さらに神は、神の民イスラエルに対する災いとさばきに関連して、その深い悲しみを形容するときにひとり子を失うような悲しみであると表現し、この語を用いている（エレ 6 章 26 節、アモス 8 章 10 節、ゼカリヤ 12 章 10 節）。神の民は、神にとってそれほどにいとおしい存在であったのである。

(3) 御子という名、御父と御子の関係

◆アブラハムとイサクの関係は、父なる神と子なる神との関係を指し示している。その関係を客観的に言い表す時には「御父」と「御子」ということばを用いる。御子は御父にとって「ひとり子」である。

- 「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」（ヨハネ1章18節）
- 「神は、実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハネ3章16節）

①永遠の親密な交わり

◆御子という表現は、御父にとって唯一無比、かけがえのない存在であり、永遠の親密な交わりの深さを表わす称号である。ヨハネは「父のふところにおられるひとり子の神」と表現している。「ふところ」ということばは、親しさや深いつながりや結びつきを表わしている。厳密には「ふところに向かって」であり、場所だけでなく、方向性をも表わしている。つまり、御父の思いのすべてが御子によって完全に答えられているという絶対的な交わりを示すことばである。そこにはおおいがなく、制限された交わりとか、程度の限られた親しさなどというものはない。完全なる熟知、完全なる喜びがそこにある。父の心は完璧なまでに子の心であった。

②愛の住みか(愛と従順)

◆また「ふところ」とは「愛の住みか」でもある。つまり、御子は永遠の愛、絶えることのない愛の抱擁の中に住んでいるということである。愛とは、自分にとって最も価値あるものを与えることである。

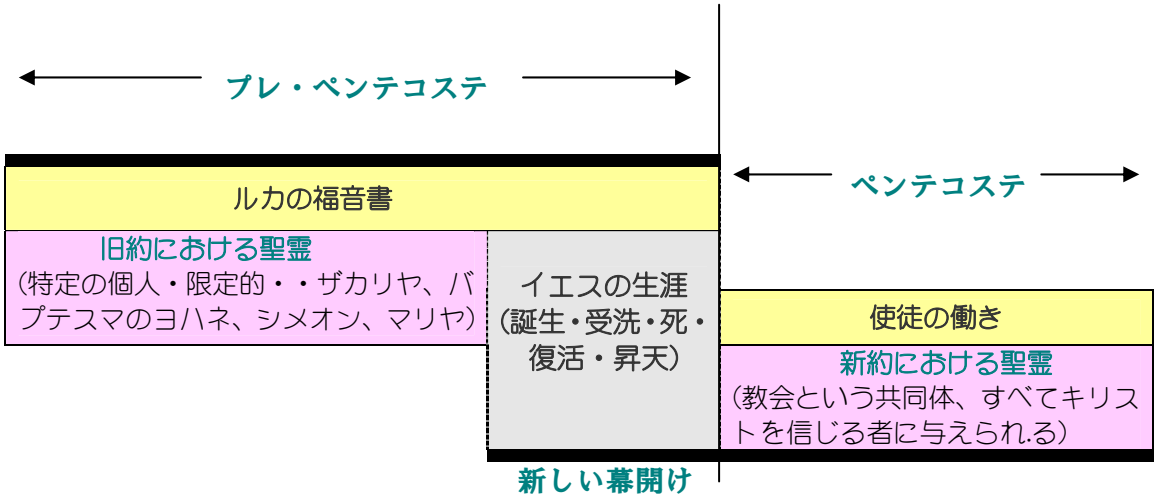
- 「御父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった」（ヨハネ３章３５節)とあるように、御子が万物を所有するのは、御父の御子に対する愛の贈り物のゆえである。
- 「父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになる」(同、５章２０節)とあるように、御父の深遠な計画はすべて、愛のゆえに御子の前にもれなく開示される。そこには秘密はない。
- 「わたしが自分のいのちを再び得るために、自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます」(同、１０章１７節)とあるように、愛に基づく御子の自発的な従順が、さらに御父の愛を引き出している。しかもその愛は十字架の勝利という報いを得させるものとなった。
- 「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました」(同、１５章９節)とあるように、御子は御父との愛の中に私たちを招いておられるのである。

(4) あなたは、御父と御子の愛の交わりの中に招かれている

◆「神のひとり子」である「御子」は、御父にとって最高の愛の対象なのである。御父はその御子さえ惜しむことなく、私たちのために死に渡されたのである。何という驚くべき愛であろうか。そしてさらに驚くべきことに、御父も御子も、その愛の交わりの中に私たちを招き入れようとしてお

られるのである。
◆「神は、あなたを、御子の姿に似た者にあらかじめ定められた」(ローマ８章２９節)とあるように、御父が御子に対して語られたように、あなたに対しても、「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」と言ってくださるかけがえのない存在なのである。神にとって喜びの存在なのである。その証拠に、あなたは創造され、贖われたのである。

8. 新しい時代の幕開けとしての聖霊



① 共観福音書の中で、イエスの生涯と聖霊の関わりを特に印象的に書いているのはルカである。ルカはその福音書の最後の部分を、父の約束を待つようにというイエスのことばをもってしめくくっている(24 章 49 節)。使徒の働きは、ルカによる続編として、今や聖霊がキリストの働きの後継者としてその働きを受け継いでいる。
② ペンテコステにおいては、かつての旧約の特定の人たちに聖霊が与えられたものとは異なり、教会という共同体に対してであり、その中の信者すべてに与えられた。
③ 聖霊はイエス・キリストの誕生に深い関わりがあった。すなわち、聖霊の超自然的な働きにより、マリヤを通してイエスは誕生した。聖霊がマリヤの上に臨み、いと高き方の力が彼女をおおったことにより、聖なる神の子イエスが誕生したのである。ルカはイエスの誕生とバプテスマのヨハネのそれについて、聖霊の働きによるものであると伝えてあるが、その内容について注意深く区別している。ヨハネの場合は「母の胎内にあるときから聖霊に満たされ」(1 章 15 節)と記されているが、イエスの場合は誕生それ自体が超自然的な聖霊のわざであった。その意味ではイエスは聖霊によるプロダクト(産物)ということができる。

(1) イエスの生涯における聖霊の働き

◆イエス・キリストは地上に降って来られた神であるが、同時に完全な人となられた。そして自分自身からは何事もなさらなかった。完全に御父に信頼し、御父に拠り頼むことを選ばれた。その誕生からその死後に至るまで、つまり、その地上の全生涯を通じて、一日たりとも、御霊の助けなしに行動することをなさらなかった。キリストは御霊(聖霊)の助けと力を必要とする道を選ばれたのである。御父に信頼することと、御霊に頼ることは実は同義である。御霊はまぎれもなく、神ご自身であり、「神の御霊」と呼ばれている。

① ＜誕生＞・・聖霊がマリヤの上に臨み、イエスは母の胎に宿った(1 章 35 節)。[注13]
② ヨハネの紹介によればイエスは「聖霊と火とのバプテスマをお授けになる」方である（3章16節）。
③ ＜受洗＞・・ヨハネから受洗したイエスは祈っていると、天が開け、自分の上に「聖霊が，鳩のような形をして」下ってくるのを見た（３章２２節）。そしてイエスは聖霊に満たされた。
④ ＜荒野の誘惑＞・・聖霊に満ちたイエスはヨルダンから荒野に赴くが，それも聖霊の導きによるものであった（4 章 1 節）。荒野でのサタンの誘惑を受けられ、勝利された。
⑤ ＜宣教の働き＞・・それから「イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた」（４章１４節）。そしてナザレの会堂でイザヤ書を朗読し、「わたしの上に主の御霊がおられる」ということばが、自分において実現したと宣言する（4 章１６～２１節）。またこのことは、使徒の働き１０章３８節によっても確証されている。「それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし・・」。[注14] 御霊はキリストの上にとどまられ、キリストのうちに住み、キリストとともに働かれた。
⑥ 実際にイエスの活動が始まると、聖霊に対する言及はそれほど多くはなくなるが、それでも随所に登場する。たとえば、「神の指(聖霊のこと)によって悪霊どもを追い出しているのなら、神の国はあなたがたに来ていると、キリストははっきりと語っている(ルカ１１章２０節)。そのことを、ヨハネ福音書においては、キリストは、ご自分のうちにおられる御父がそのわざをしておられるとも言っている(ヨハネ１４章１０節)。
⑦ イエスは「聖霊によって喜びにあふれて」天の父に祈った（ルカ１０章２１節）。聖霊の力によって、イエスはどんなときにも、どんな苦難の中にあっても、喜びを持ち続けることができた。
⑧ 弟子たちに対しては、当局に連行されたら「言うべきことは、そのとき聖霊が教えてくださる」から心配しないよう励まし（１２章１１～１２節）、聖霊を汚す者は赦されないと警告した（１２章１０節）。さらに「天の父が，求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう」と語って聖霊を求めるよう勧めている（１１章５～１３節）。
⑨ ＜最後の約束＞そして「わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります」という最後の約束（２４章４９節）も聖霊のことである．この約束が成就して聖霊が著しく働いた記録が、続編の使徒の働きである。

(2) 聖霊による新しい時代の予告

① ルカの福音書の冒頭、１～２章に登場する人物はいずれも聖霊と関係づけられている。彼らはいずれも旧約的な聖霊の働きを象徴する人物であり、彼らによって準備され、今始まろうとするイエスの生涯を聖霊による新しい創造、神が約束したあがないの成就としている。
② そのために、ルカは特に公的活動開始前のイエスと聖霊の関係を強調し、イエスの活動の源を明らかにする。イエスの活動の前提となる聖霊の働きは、その開始とともに再び強調され（４章１４、１８節)、この聖霊のもとで新しい創造に向けたイエスの活動が展開されていく(１０章２１節)。その活動を完成する十字架において、イエスが自らの霊を父にゆだねるとき(２３章４６節)、それは聖霊の働きのもとで誕生したイエス(１章３５節)の生涯を完結するのみ

注13　聖霊による受肉はとても大切な真理を含んでいる。というのは、このキリストのうちに全被造物が取り込まれたからである。キリストは第二のアダムとして人類の代表である。それえ、やがて、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。・・・これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、・・この世をご自分と和解させ・・られたのです。」（Ⅱコリント５章１７～１９節）

注14　旧約聖書では、王、大祭司、預言者が神の働きをするために任職の油を注がれた。それは神の権威によって力ある働きをするためである。イエスが聖霊の油注ぎを受けたことは、イエスがメシヤ(キリスト)として、まさに王の王、大祭司、そして真の預言者として来られた事を意味している。

でなく、その霊が再び父のもとから送られる(２４章４９節)新しい霊の時代を予告する(ヨエル３章１～２節参照)。なぜなら、その後、聖霊を受けた使徒たちが(使徒２章１～４節)、聖霊に促されて、イエスのもたらした福音を、すべての民に向けて宣べ伝えていくからである。

③　ルカの福音書23章46節でイエスは大声で叫んで言われた。「『父よ。わが霊を御手にゆだねます。』こう言って、息を引き取られた。」これはルカ固有の記述である。これは、イエスがその死に際して、父への信頼のうちに霊を父に返す姿を述べている。使命の成就と同時に、イエスが父に返した霊が再び父によって地上に送られ、聖霊の新しい時代がもたらされていく。イエスの活動が聖霊のもとで開始されたように、使徒たちの活動も同様に聖霊のもとで開始されていく。

◆このように、ルカは聖霊とイエスの関係を、誕生のみならずその死においても強調し(23:46)、聖なる方、神の子としてのイエスの生涯全体を聖霊の働きのもとで解釈している。そしてこの同じ聖霊が教会の働きの源泉となっていく(ルカ24章49節、使徒2章1-4節)。

9.　祈りの強調

◆ルカは他の共観福音書以上にイエスの祈りを非常に強調している。聖霊について強調したルカは、同時に、聖霊の賜物に対応して人間側の責任である祈りを重視している。

◆ルカの福音書１１章１３節は<聖霊と祈りの関係>を表わすルカ独自のものである。

「天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう。」

◆第一に興味深いのは，イエスの祈りの場面が共観福音書には９つ記録されていることである．そのうち７つの場面がルカに固有のものである。しかもそれはイエスの生涯と活動における重要な転換点となっている場面である。

(●印はルカ固有のもの)

①　公的活動開始前、イエスが神の子であることが宣言される洗礼(３章２１～２２節)●
②　群衆を前にしてよく荒野に退いて祈り（５章１５～１６節）●
③　イエスの後継者となる十二使徒の選び(６章１２節～１６節)●
④　使徒を代表するペテロの信仰告白の前(９章１８節)●
⑤　イエスの受難、死、復活、昇天というイエスの最終使命を先取りする変貌(９章２９節)●
⑥　派遣した７０人の弟子たちが戻ってきた時の祈り(１０章２１～２２節)
⑦　主の祈りを教えられる前(１１章１節)●
⑧　最終使命実現の直接契機となる逮捕直前(ゲッセマネ)(２２章４１～４２節)
⑨　十字架上の二つの祈り(２２章３４節、４６節)●

◆このようにイエスの歩みと不可分な祈りは父と子の絆を明らかにするのみならず、イエスに従う者たちの模範ともなる(６章２８節、１１章２節～４節、１８章１節、２２章４０、４６節)。

◆また主イエスは、弟子のために祈り（22章31～32節）、ご自身のため（22章41～42節）また、敵のためにも祈っている（23章34節）。

◆さらに顕著なことは，ルカに固有なたとえで祈りを扱っているものが3つある。

①　11章５節以下の「真夜中の友人」
②　18章１節以下の「不正な裁判官」
③　18章10節以下の「パリサイ人と取税人」

◆また主イエスは弟子たちに、次のように祈るように励ましている。

①「あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。（6章28節）
②「誘惑に陥らないように祈っていなさい。」(22章40節)

（1）ルカ福音書独自のイエスの祈り

樋口信平著『主の御顔を仰ぎ見て』（祈りの神学新約 2)参照

① 洗礼

3:21 さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、

3:22 聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

●〔はじめに〕

洗礼を受けられたときの祈り。主イエスが祈られたという最初の言及。主イエスは公生涯に入られる前、ナザレで３０年間過ごされたが、この間祈られたという記録はない。しかし祈りの生活をされたことは疑う余地はない。ここではじめて絶えず祈っておられたということが、初めて公に現わされたといえる。主はその公生涯に入られるに当って、公衆の面前で祈られたのである。

●〔どのような状況の中で祈られたのか〕

主は一般民衆の中に混じってその中に入られて受洗した。なにか特別の取り扱いを受けたのではなかった。それは主の謙遜の現われである。自らへりくだられて、卑しくされて、受洗されたのである。

●〔主のささげられた祈りの性格は何か〕

主のささげられた祈りはどんな内容であったのか。民衆のように、罪の告白は無かった。おそらく、神への賛美、感謝、あがめることであったと思うし、福音宣教を開始するに当って、神との交わりを深め、神の導きを求めたことであろう。神の恵みのあらわれ、また聖霊の注ぎを祈り求めたにちがいない。また父の約束しておられることを祈りによって求めた。

●〔どのような祈りの結果が現われたのか〕

① 天が開かれた・・祈りは天を開く鍵である。
② 聖霊の降臨・・・今やイエスはその預言者的働きをするに当って、その資格が与えられた。
③ 天からの声・・・「あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」これは主の祈りに対する答えである。だから「あなた」なっている。マルコでは天からの声がキリストに語られている。

●〔終わりに〕

初代教会は、その福音宣教の開始に当って、エルサレムの屋上の間に上って「祈りに専念していた」のは、この主の公生涯の出発に当って、祈っておられる姿にあやかったと言える。ことの始め、出発に祈ることは、主のわざを全うする秘訣であり、力の源泉である。

② 荒野に退かれて

5:16 しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。

●〔どのような状況の中で祈られたのか〕

主イエスが後期ガリラヤ伝道を開始され、この期間、主は多くの教えをなし、また語られ、いやしのわざをなされた。主にとって非常に多忙な時であった。それだけに主の人気は絶頂に達した。そうした中にあっても、主は神との交わりの重要性を認識されて、それを守られた。奉仕と祈り、この二つの要素がここに美しく結び合わされている。「しかし、イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群れが話を聞きに、また、病気を直してもらいに集まって来た。しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた」

主が多忙な働きの最中にあって、祈りを欠かすことなく、神との静思の時を持たれたことを知る。主イエスの祈りの生活の一端をここから学ぶことができる。

●〔時間、場所の問題〕

主は「よく」(=たびたび)祈っておられた。つまり不規則ではなく、規則的に、繰返しなされていと考えてよい。しかもこの祈りは時間をかけたものであった。祈りは主にとって習慣的なものであった。「荒野」とは特定の場所をさしては言われていない。寂しい、人里離れた所であった。

●〔祈りの教訓〕

◆主はなぜ多くの時間を祈りに費やさなければならなかったのか。その必然性はどこにあったのか。それは人が順境にあるのは、逆境よりも危険であるという危機感を感じられたからではないか。

③　１２使徒の選び 6:12 このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。 6:13 夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。	●〔どのような状況の中で祈られたのか〕 主イエスは、その伝道生涯において、危機的状況に立たされたり、重大な決定的なことをなされる前、決して人とは相談されなかった。必ず、まず第一に神との相談された。さて、今、極めて重大な段階に直面した。イエスご自身に関わることだけならば、さして重要とはいえないかも知れない。しかし、これからなさろうとすることは、非常に責任のあることであった。それは他人の一生に関わることであった。この働きが何であるか、その払うべき犠牲、その報いなど全く分からないにもかかわらず、他人をこれと関わらせる、その重大な決定に当って、主は、まず神と相談された。 ●〔この祈りの課題〕 主の祈りの課題は、主の教えを吸収し、奇跡の証人となり、メッセンジャーとなって、この世に向かって福音を宣べ伝え、教会を建て上げる人を選ぶことができるように祈られた。その任に堪えられる人物を。しかし彼らの中に何か優れたものがあったらでなく、教えられやすいという点にあったといえる。訓練を受けやすい人たちである。ではなぜユダを選ばれたのか。それは神のみこころをなすためとしか言いようがない。 ●〔この祈りの方法〕 イエスは「山に行って」祈られた。地名は明示されていないが、カペナウムの近辺の山と思われる。山上の教えが１２使徒の選任に続くところから、その山の近くと思われる。主は何の障害もなく、妨害もない、中断させられることもない場所を選ばれて、神とひとり、ひそかな霊の交わりをされたのである。しかも長く神と交わられた。徹夜の祈りを持たれたのである。世々の聖徒たちも長時間祈ったことはよく聞かされるが、神のみわざの前進のために、時には、長時間祈るべきであることを教えられる。 ●〔祈りの結果〕 ◆祈りの結果、１２人の使徒たちが選ばれた。 ●〔おわりに〕 ◆イエスの徹夜の祈りが、世界宣教と関わりがあったことを思うとき、私たちは、祈りの力がどのような大きな影響を与えるか、今さら驚きを覚える。祈りの重要性、必要性、影響性をもう一度確認したい。
④ ペテロの信仰告白の前 （キリスト受難予告前） 9:18 さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。「群衆はわたしのことをだれだといっていますか」	
⑤ 変貌 9:28 これらの教えがあってから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れて、祈るために、山に登られた。 9:29 祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた。	●〔はじめに〕 ルカが、主の祈りの生活に深い関心を寄せていたことを知る。山で祈られる主の姿に目を留めよう。祈りは事態を変える力がある。 ●〔祈られる主イエスの姿〕 主が、多忙な福音宣教の中にあっても、規則的に祈られていたことは、すでに学んだが、９章においても、私たちは祈られる主イエスの姿を見る。五千人に食物を与えられた出来事の前に、主は使徒たちを連れて「ベツサイダ」という町へひそかに退かれた。「ひそかに退かれた」とは、祈りのためであったと考えられる。また、５千人の給食のときにも、「それらを祝福して裂」かれたのは、食前の祈りである。さらに、18 節では、主がひとりで祈っておられる姿が描かれている。 ●〔祈りの目的〕 主は山で何のために祈られたのか。それは人の子の栄光の姿を現わすためであった。祈っていると主の姿が変わったのは、主が弟子たちに、来るべき完成

	される御国において、主がどのようなお方になるのかを前もって味わいさせるためであったと理解できる。
⑥ 弟子たちが戻ってきた後 10:21 ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです。これがみこころにかなったことでした。・・・」	
⑦ 主の祈りを教えられる前 11:1 さて、イエスはある所で祈っておられた。	
⑧ ゲッセマネの祈り 22:41・・ひざまずいて、こう祈られた。「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取り除けてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。22:44 イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。	
⑨ 十字架上の祈り 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」 23:46 イエスは大声で叫んで言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」	●〔はじめに〕 これは十字架上の七言のうちの第一言である。肉体的、精神的、霊的な苦しみの中にあるにもかかわらず、イエスが十字架につけられて最初に口から出て来た祈りがこれであった。 ●〔御父への呼びかけ〕 この呼びかけには、父なる神に対する絶対的な神への信頼がある。このような苦しみの状況の中でも、父なる神の名を呼んで祈れるとは、御父に対する信頼への表われである。 ●〔祈りの目的〕 『父よ』に続いて、主の口から出たのは「彼らをお赦しください」という驚くべきことばである。人々の犯した罪は、免責など与えられるようなものではなかった。この祈りのことばは、「多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする」(イザヤ53章12節)のように、とりなし的であり、また自らの死の目的と意味の説明的なことばである。 ●〔祈りの理由〕 それは「彼らはなにをしているのか分からないから」であった。もし彼らが悟っていれば栄光の主を十字架につけることはなかった。私たちの多くは自分の犯した罪に対して無知なのである。 ●〔おわりに〕 私たちも主の模範にならって、私たちの敵、私たちを憎み、傷つけた者に対して、赦しを祈るべきである。

(2) 祈りについての教え・・いずれもルカ独自の記事である

① 主の祈り・・・・・・・・１１章２節～４節
② 真夜中の友人・・・・・１１章５節～
③ 不正な裁判官・・・・・１８章１節～
④ パリサイ人と律法学者・１８章１０節～
⑤ イエスのペテロに対するとりなし　２２章３１節～

この中から、①と②と⑤を取り上げてみよう。

① 主の祈り

a. 「主の祈り」の構造、およびマタイとルカとの相違点

マタイの福音書(６章９～13 節)	ルカの福音書(11 章)
(前半) 天にいます私たちの父よ。 御名があがめられますように。 御国が来ますように。 みこころが天で行なわれるように 地でも行なわれますように。	(前半) 父よ。 御名があがめられますように。 御国が来ますように。
(後半) 私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。 私たちの負いめをお赦しください。 私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。 私たちを試みに会わせないで、 悪からお救いください。 〔国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。〕	(後半) 私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。 私たちの罪をお赦しください。 私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。 私たちを試みに会わせないでください。

◆ルカの主の祈りは、マタイに比べてシンプルな形となっている。前半において、呼びかけは、マタイが「天にいますわれらの父よ」と呼びかけているのに対して、ルカでは「父よ」のみである。またマタイでは「みこころが天で行なわれるように・・」という部分は、ルカには見られない。おそらく、それは、「御国」の中に「みこころが行なわれる」ことが含まれているのかもしれない。

b .コンテキスト(文脈)

◆前後の出来事の配列を考えてみよう。ルカは「いろいろな記事をもとに、順序を立てて書いている」。とすれば、そのコンテキストの中に彼の言いたいメッセージが隠されていると考えてよい。このコンテキストから何が見えてくるだろうか。

７０人の弟子たちの派遣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０章１～２０節
イエスの聖霊による喜びの賛美(祈り)・・・・・・・・・・・・　２１～２４節
何をしたら永遠のいのちをえることができるか・・・・・・・・・２５～３７節
マルタとマリヤ(マリヤは良いほうを選んだこと)・・・・・・・・・　３８～４２節
イエスの祈りと弟子たちから祈りを教えてほしいとの要求　・　１１章１～　４節
祈りについての教え・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５～１３節

c. 内 容

＜前半＞

◆イエスは祈る時、「父よ」と呼びかけるように言われた。なぜ、イエスは父と呼んだのか。その一つの意味は父が私たちのいのちの源として私たちを造られた神だからである。もう一つの意味は、父は子である私たちを育てる成長させる方だからである。つまりひとりの人間として人格的に一人前にする方なのである。そもそも父ということばは、子との信頼関係によって成り立つ「ことば」である。

◆この主の祈りは、賛美ではなく、嘆願である。そして最初の嘆願は「御名があがめられますように」である。主の祈りの内容はその最初から、 人間が自分からは決して願わない祈りである。私たち人間にとって、最も強い誘惑とは自分が他の誰よりもあがめられたいということである。言い換えれば、自分が神のようになりたいのである。すべての栄光と称賛を自分自身が受けたい。他人から「あの人はすごいですね！～さんは素晴らしいですね。」という言葉を言わせたい。人間的に目に見えるような形で成功すればするほど、この誘惑は激しく襲ってくる。それゆえ、イエスはまず、「御名があがめられますよう」と祈りなさいと言われたのである。御名があがめられますようにという祈りは、ただ神の栄光のために生きるための祈りなのである。神に栄光を帰さなかったヘロデは虫にかまれて死んだ(使徒の働き１２章２０節)。

◆「御国がきますように」という祈りのもつ意味

そもそも「御国」とは何か。ユダヤ人を対象に書かれたマタイの福音書では「神の国」のことを「天の御国」と記している。「神の国」も「天の御国」(あるいは単に「御国」)も同じ内容である。それは基本的に、神の支配、神の統治という意味である。その支配とは、愛と恵みによる支配である。暴君ではなく、心優しく、配慮に富んだ支配である。

◆イエス・キリストの教えは神の国の教えであり、数々の奇跡(みわざ)は、その支配の力をあかしするものであった。

◆この祈りの持つ背景・・・御国における＜すでに＞と＜いまだ＞という現実がある。この現実のゆえに、＜三つの願い＞が生まれてくる。一つは、実現しているのですから、そのことを気づかせてくださいという祈り。そしてもうひとつは、いまだ実現していないのですから、それを私のうちに、完全に実現してくださいという祈りになる。

＜後半＞

◆後半の祈りは、生存の保障を求める祈りであり、すべての人間関係における平和のための祈りであり、すべての悪からの防衛のための祈りである。

② 真夜中の友人(１１章５節～１３節)

◆イエスは多くのたとえを通して、深遠な真理を述べられたが、祈りについてのたとえとしては、ルカ１１章の「真夜中の友人のたとえ」と１８章の「やもめと裁判官とたとえ」の二つである。そこには、自分のために、そして他人のために、執拗に、熱心に、そして不屈の思いで祈りをささげるべきことを教えている。

◆ところで、「主の祈り」後半の最初の部分である「私たちの日ごとの糧を毎日お与えください」という祈りは、聖霊様を求める祈りを含んでいることが文脈から知ることができる。友人のためにパンを求める人の話(ルカ 11 章５節以降)を見てみよう。「パンを三つ貸してくれ」と真夜中に友人の家を訪ねた人は、実は、今日の私たちクリスチャンの姿である。三つのパンとは、一日に必要な食糧である。しかし自分の手元には「何もだしてやるものがない」という。つまり、友人のニーズに応えることができない私たちの無力さが背後にあるのである。そんな時、日ごとの糧を得るには聖霊様の助けが絶対に必要なのである。私たちがそのことを認めて、真剣に父に祈ることを通して、父は聖霊様を与えてくださり、その方の助けによって、はじめて日ごとの糧を得ることができるのである。このことは、イエスのライフスタイルを考えるとき、納得できるであろう。

◆イエスは「わたしは天から下ってきたいのちのパンである。」「わたしを食べる者は生きる」(ヨハネ６章)と言われた。「イエスを食べる」とは、私のうちに生きておられキリ

ストと信仰によって結ばれることを意味する。私のうちにおられるキリストが私を通して現われることが生きることである。そしてそのことを実現してくださる助け主が聖霊さまである。この方を日々祈り求める祈りを通して、私たちは日々養われていくのである。

◆祈りの仕方についての教え

a. 祈りは執拗でなければならない

人間同士ならば、あまりしつこいと嫌がられてしまうが、神の場合には、それを求められる。だから主は「求めなさい。捜しなさい。たたきなさい。」と教えている。そしてその求めに答えて、良い物、つまり聖霊が与えられるのである。

b. 祈りは熱心でなければならない

執拗であることは、換言すれば、熱心であることである。「あくまで頼み続けるなら」とは、切に頼むことである。一所懸命になって、願うことである。決して引き下がらないで、求める姿勢が求められている。祈りの勇士とは、いずれも熱心に祈り求める者たちである。

c. 祈りは不屈でなければならない

どのような障害にもめげず、ひるまないで、求めたことが与えられるまで、祈りを貫く不屈の精神が必要である。途中で放棄してしまうことは、祈りの精神に反する。与えられるまで求め続ける必要がある。このたとえの人は近所の人を知っており、また愛の交流がある。つまり信頼関係が打ち建てられている。だからこそ、大胆さと信頼をもって求めることができた。祈りにおいても同様である。大胆さと信頼をもって祈り求めるなら、神は必ず最良のもの、必要なものを与えられるということである。

⑤　イエスのペテロに対するとりなし(ルカ２２章３１～３４節)

◆使徒ペテロは１２弟子の中で最も代表的な立場にあった。彼の性格とあいまって、サタンの攻撃の標的となりうる可能性があった。イエスは、ペテロがサタンに試みられて失敗することをご存知であった。それゆえ、ペテロが信仰を無くさないようにととりなしの祈りをささげている。

◆ペテロは、熱烈な行動家、大胆な自信家であった。しかしその反面、不安定な臆病者という弱い人間性をもっていた。性格的にペテロは、指導者としてすぐれた面と弱い面を持っていた。このことが、サタンの格好の攻撃の標的とった。サタンはその攻撃権を手にした。つまり、サタンがペテロを誘惑することを、神によって許されたのである。その目的は「麦をふるいにかける」ためであった。

◆主はペテロがサタンの誘惑に会い、激しい攻撃を受けることを予知されたので、ペテロのためにとりなしの祈りをささげられた。「あなたのために祈りました。」この主のとりなしのゆえに、弟子たちの信仰は、ゆさぶられても、立ち直ることができるのである。もしイエスのとりなしの祈りがなければ、信仰は失われていたに違いない。

◆イエスのとりなしの祈りの目的は、自分が神によって助けられることによって、他の人を助けることである。「あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」と主は言われた。自分が神のあわれみを受けたならば、兄弟たちも神のあわれみを受けることができるのだという望みを与えよ、というのがこのみことばの意味である。

10. イエスのたとえ話

(1) イエスのたとえ話における異質性

◆イエスのたとえ話には独自性がある。なぜ独自かと言えば、その語り手がイエスだからである。つまりイエスは神の世界を知っている唯一の方であり、「天国のことをあらわす地上の話」がたとえ話の内容なのである。つまり、イエスはたとえ話で天国のこと(神の世界、神の支配)を語ってくださったのである。
◆イエスは地上の日常的な材料、地上の情景を用いながら、天国についての話をしているわけであるから、そこにはなにか奇妙な部分が、異質な部分が必ずあるはずである。しかし、「その奇妙な部分」「異質な部分」こそイエスが最も言わんとするところである。そしてそれを合理化することなく、そのまま受け止めることによって、イエスの言わんとするところが見えてくるのである。
◆その「奇妙な部分」とは、非合理的、反自然的、不可解的であるということである。その例として、たとえば「ぶどう園の主人」のたとえをあげることができる。朝から働いた者と午後の五時ごろからほんのわずかしか働かなかった者たちに対して、このぶどう園の主人は、同一の賃金１デナリを払ったのである。どうみても合理的とはいえない。ぶどう園の主人はまことに奇妙な人なのだということをそのまま受け止めることによって、そのたとえが言わんとするところが見えてくるのである。
◆イエスは私たちの身近な日常的なある状況を素材にして、天国のことを言い表わされたのであるから、私たちに理解させようとする目的があったことは明確である。しかし天国(神の世界、神の支配)のことは、本来的に、異質なのであるから、どうしても奇妙な部分があり、しかもそこに一番大事なものがあるとすれば、「奇妙」であり続けるものとして、それは不可解のうちに残るはずである。
◆ルカの福音書１５章に記されている「迷った一匹の羊」のたとえ話は有名で、その内容はきわめて簡単である。問題はどこに中心点が、あるいは強調点があるかということである。それによって本来ならばこのたとえ話の題名が決まる。重要なことは、たとえ話には必ず一つの中心点があるということである。その中心を強調するために各部分があると考えてよい。中心をはずすなら、的外れということなる。たとえばこの話で、野原に残しておいた９９匹のことを心配して、羊飼いの留守に、もし狼に襲われたらどうするのかという点に目が行くならば、このたとえ話の宝は見えなくなる。９９匹の羊は迷っていなくなった一匹の羊を強調する部分であり、中心はいなくなった羊を探す羊飼いにこそ中心点がある。この羊飼いはどこまでも羊を捜し歩く。そしてそれを見つけた羊飼いの異常な喜び、しかも近所の人を呼び寄せて祝宴を開くという異常さ、そこにこのたとえ話の中心点がある。この羊飼いのたとえによって、イエスは神と神の愛を教えようとされたのである。私たちひとり一人は、この羊飼いなる主の喜びの中に支えられていることを決して忘れてはならない。

<チェック・ポイント>・・・〔ルカの福音書に記されているたとえ話〕
① イエスの語られたたとえ話を全部書き出そう。
② ルカの福音書のどこにたとえ話が集中しているだろうか。なぜそこに集中しているのかを考えてみよう。
③ またそのたとえ話はだれに対して語られたのか。またそのたとえ話の中心点(驚き、異常さ)は何かを考えよう。
④ そして最も大切なこと・・「あなたはどうなのか?」というイエスの問いに答えなければならない。

(2) ルカの福音書に記されているたとえ話のチャート（完成させよ!）

● ルカ 独自	聖書箇所	タイトル	対　象	内容の要点
	7:31～32	遊んでいる子ども たち		
●	7:36～50	二人の債務者		
●	10:25～31	良きサマリヤ人		
	11:11～13	求める子		
●	12:16～21	愚かな金持ち		
●	12:42～48	忠実な家令		
	12:57～59	訴えられる者		
●	13:6～9	実らないいちじく		
	13:18～19	からし種		
	13:20～21	パン種		
●	13:23～24	狭い戸口		
●	14:15～24	盛大な晩餐会		異常な拒絶と異常な招き
●	14:28～30	邸宅を建てる者		
●	14:31～32	戦いを交える王		
●	15:3～7	失われた羊	取税人、罪人 パリサイ人 律法学者	羊飼いの異常な喜び
●	15:8～10	失われた銀貨		女の人の異常な喜び
●	15:11～32	二人の息子の父		放蕩息子に対する父の異常な喜びと兄への愛　（先行されている赦し、異常なもてなし）
●	16:1～8	不正な家令	弟子たち	家令の不正にもかかわらず、抜け目なく行動した「利口なやり方」をほめた主人
●	16:19～31	金持ちとラザロ	金の好きな パリサイ人	
●	17:7～10	給仕するしもべ (農夫とそのしもべ)	弟子たち	
●	18:2～8a	願い続けるやもめ (無情な裁判官)	弟子たち	
●	18:9～14	パリサイ人と 取税人	自分を義人だと 自認する者	

(3) ルカの福音書独自のイエスのたとえ話から

◆チャートをみるとルカの福音書にはルカ独自のたとえ話が多い。ということは、その独自なたとえにあるメッセージこそ、ルカが最も伝えたかったことだと推論することができる。その中からいくつかのたとえを取り上げて考えてみよう。まず、それぞれのたとえの中心点(神の異常さ)は何かを考えてみよう。

①良きサマリヤ人（10章25～31節）

②盛大な晩餐会（14章15～24節）

③パリサイ人と取税人（18章9～14節）

④ふたりの息子の父〔放蕩息子と兄〕（15 章 11～31 節）

⑤実らないいちじく(13 章 1～ 9 節)

〔附記〕 ルカにおける「食卓」の救済的意味

● 5: 29 （共観福音書）
そこでレビは、自分の家でイエスのために大ぶるまいをしたが、取税人たちや、ほかに大ぜいの人たちが食卓に着いていた。

● 7: 36 （ルカ固有）
さて、あるパリサイ人が、いっしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家にはいって食卓に着かれた。すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油のはいった石膏のつぼを持って来て、・・・・・すると、いっしょに食卓にいた人たちは、心の中でこう言い始めた。「罪を赦したりするこの人は、いったいだれだろう。」

●11: 37 （共観福音書）
イエスが話し終えられると、ひとりのパリサイ人が、食事をいっしょにしてください、とお願いした。そこでイエスは家にはいって、食卓に着かれた。

●12: 37
帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうが帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。

●13: 29
人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。

●14:　1　（ルカ固有）
ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家にはいられたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。
●14: 15　（共観福音書）
イエスといっしょに食卓に着いていた客のひとりはこれを聞いて、イエスに、「神の国で食事する人は、何と幸いなことでしょう。」と言った。
　⇒14:15～24には王の婚礼の祝宴の招きを断った者と招きに応じた譬え話が記されている。
●15:1～2（ルカ固有）
さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」
●15:22～　（ルカ固有）
ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。
●16: 21　（ルカ固有）
金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。
●22: 14
さて時間になって、イエスは食卓に着かれ、使徒たちもイエスといっしょに席に着いた。
●22: 21
しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。
●22: 27
食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょう。むろん、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちにあって給仕する者のようにしています。
●22: 30
それであなたがたは、わたしの国でわたしの**食卓**に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。
●24: 30　（ルカ固有）
彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。

◆ルカの福音書や他の共観福音書、ヨハネの福音書のみならず、書簡や黙示録においても、聖書には数多く食卓(食事)の場面が出てくる。人間生活の日常的な場面として欠かすことの出来ない食事であるが、聖書は、神と人との交わりを食卓によって象徴的に表現している。つまり、聖書は神の国を祝宴の食卓として表現しているのである。

◆イエスの救済的働きとしての「食事」はしばしば癒しや罪の赦しと結合される。(ルカ５章２９節～３２節、１４章１～６節）と同時に、シメオンのことば(２章３５節)を反映する形で、敵対者の存在によっても特徴づけられ(ルカ５章３０節、７章３６節、１４章１節)、イエスによる救済を拒否する存在をも浮かび上がらせる。救済的意味を持つ一連の「食事」は、最後の晩餐とそこでの「新しい契約」(ルカ２２章２０節)へと収斂する。イエスの受難、死、復活、昇天を通して締結されるこの「新しい契約」は、神とイスラエルのみならず、人類全体との和解を実現し、「食事」の意味を完成するのである。
（フランシスコ会聖書研究所訳注「ルカによる福音書」―改訂新版、サンパウロ、2002 年）

11.　真の弟子としての資格

＜はじめに＞
◆本講義のセクション０４の「イエス・キリストの生涯の区分」とセクション０５の「ルカの福音書の梗概と鍵語」をもう一度振り返ってみよう。そこから何が見えてくるだろうか。イエスがガリラヤからエルサレムへの旅をはじめられる頃(9 章 51 節～)には、イエスに対する反対は強くなっていた。そのためイエスは民衆から次第に弟子たちに多くの時間を取るようになっていく。またこの部分には(9 章 51 節～19 章 27 節)ルカ独自の教えやたとえ話が多く存在していることを銘記しておきたい。
◆マタイの福音書２８章１８～２０節の大宣教命令で言われていることは、「弟子としなさい」ということであり、「出て行き」「バプテスマを授け」「教え」という三つのことばは、みな「弟子とする」という本動詞にかかっている。「弟子とすること」の重要性は、弟子づくりが、世界と歴史における神の救いの計画を実現するための重要な手段だからである。
◆イエスが祈りと断食の後、１２人の者たちを「選び」また「呼び寄せ」て、共同生活することを通して、弟子づくりをはじめたことを思い起こそう。今日においてもその重要性は変わらない。牧師、およびリーダーとなるように召された人々を訓練するために、十分な準備と時間、そして細心の注意を払わなければならない。そして、弟子として訓練された人たちが、やがて他の人々を同じように訓練できるようにすることである。

(1) 弟子の道―キリスト道―への招き

①弟子道の教えのコンテキスト

◆ところで、ルカの福音書に記されている真のキリストの弟子とはいかなるものであるのか見てみよう。最初に弟子について教えられている箇所は、９章２３節以降である。９章２０節で、イエスは弟子たちに向かって、「あなたがたは、わたしをだれだと言うか」と質問された。ペテロは「神のキリスト(メシヤ)です」と答えた。これこそ、ルカ福音書前半の結論である。そして後半の部分、すなわち「キリスト(メシヤ)はなぜこの世に来られたのか」というテーマに移っている。
◆ここからイエスは自分のことを「人の子」と呼び、「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして３日後によみがえらねばならないのです。」と受難と復活の予告がなされる。その直後に、イエスは弟子たちに真の弟子のあるべき姿について教え始められた。
◆「捨てられ」「殺され」「よみがえる」という順序に注目しよう。ここでイエスは、私たちの贖いのために必要な代償的死における「捨てられ」「殺され」「よみがえる」という順序を、２３節、２４節において、直ちに、弟子たち(キリスト者生活)に適用しておられる。この順序は、まさに霊的なキリスト者生活の順序でもある。もしこの順序の関係を忘れるならば、真のキリスト者生活を失い、そのいのちは枯渇することになるのである。[注15]
「イエスはみなの者に言われた。『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々

注15　ローマ人への手紙６章には、多くの強い消極面(否定面)で始まっている。「バプテスマによって、キリストと共に葬られた」「罪に対して死んだ」「キリストの死にあずかるバプテスマ」を通って、はじめて、「キリストが・・死者の中からよみがえられたように、いのちにあって新しい歩みをする」ことができるのである。この自由の道、勝利の道に至るには、死の道を通らなければならないのであって、そこを迂回することはできないのである。「捨てられ、殺され、よみがえる」という順序は、ローマ書６章６節でも同様である。前半「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられた・・」を通って初めて、後半「罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためである」に進むことができるのである。死の戸口を通らずして、戸の向こうにはいけない。しかしイエス・キリストは十字架において私たちをご自身の中に取り入れてくださって捨てられ、殺され、よみがえってくださったので、私たちはすでに戸の向こうに行くことができる。キリストに対する信仰によって、私たちは勝利を手にすることができるが、それを私たちのうちに保つためには、現実的な戦い－日々、自分の肉を、十字架につけていく信仰の戦いを余儀なくされるのである。

十字架を負い(死ぬこと)、そしてわたしについて来なさい。自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。』」

◆キリストの贖いの順序において、まず捨てられ、死ぬという段階を取らなければ、次の段階に行く事はありえないように、私たちキリスト者として選び取る個人的、継続的な死も非常に重要な、かつ基本的なものといえる。しかし、このことは、常に、この世においては拒絶されるのである。当時の宗教指導者たちは、神の道ではなく、この世の道を選び取ったため、イエスを拒絶した。この拒絶は一度限りのものではなく、キリストはご自身に従う者たちに、「日々、十字架を負う」ようにとお命じになっている。ルカ１４章２７節にも、同じく「自分の十字架を負ってわたしについてこない者は、わたしの弟子になることはできません。」と語っている(26 節、27 節、33 節―３回)。

②信仰者と弟子との違い

◆自分の罪を悔い改めて、イエスを信じることは、救いにおける明確なステップである。しかし、弟子の道への召しに応じることは、それとは異なる決断である。ある者はそれを受け、ある者はそれを拒んだ。信仰の決断とイエスの弟子となることは同一ではない。

◆したがって、ここでいう「弟子の道」とは、主を信じた後でみもとに引き寄せられた人々に対してなされるイエスの働きを指すことばとして定義したい。イエスは信仰者を訓練された弟子として成長させることを望んでおられる。それゆえにイエスは「わたしに従ってきなさい」と弟子たちを招かれる。

◆イエスの命令は、日常生活の現実の中で、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、それに彼らのいのちをも憎むべきことを語っておられる。このことが意味することは、イエスのために喜んで死ねるか、という挑戦である。イエスはここで弟子たちが弟子の道のために支払うべき究極の代価、すなわち自分のいのちを主にささげることができるように備えようとしておられるのである。それゆえ、このイエスの招きに答える前に、よく熟考する(費用を計算する)ようにと、イエスはたとえを話された。そのたとえとは次の二つである。

◆「塔を築く者」(１４章２８～３０節)と「戦いを交える王」のたとえ(１４章３１～３２節)である。この二つのたとえの真意はなにか。

- **a.** 思慮深くあること
- **b.** 完成しなければ、着手しなかった時より事態は悪化する。責任の重大さを認識すること。
- **c.** 大きな犠牲を払うだけの、やりがいのある事業(働き)であるかどうかを見極めること。
- **d.** 勝算のある戦いく、勝ち目のある戦いがどうかをよく考えよ。
- **e.** すべてを主のために犠牲にしても喜びがあるかどうか。もしこの喜びを失ったならば、塩けをなくした塩のように役立たず、投げ捨てられるだけである。

◆イエスの真の弟子とは、イエスに従って与えられる栄光を生涯、瞑想し続ける人のことである。

(2) 弟子たる者の資格―弟子の道を妨げるものを通して―(ルカ９章５６節～６２節)

◆ルカの福音書において弟子について教えられている箇所を取り上げてみよう。

「さて、彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。『私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。』するとイエスは彼に言われた。『狐には穴があり、空の鳥には巣があるが人の子には枕する所もありません。』

イエスは別の人にこう言われた。『わたしについて来なさい。』しかしその人は言った。『まず行って、私の父を葬ることを許してください。』すると彼に言われた。『死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。』

別の人はこう言った。『主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。』するとイエスは彼に言われた。『だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。』」

◆ここにはイエスの前に三人の人物が登場する。それぞれの人物に対してイエスはどのように対応されたであろうか。その対応から、弟子たる者の資格を見ることができる。

- **a.** 一人目は、イエスから招かれなかったが、自分からイエスに従うことを申し出た。イエスは「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが人の子には枕する所もありません。」と

言われたが、それはどのような意味か。

b. 二人目は、「わたしについて来なさい」とイエスに招かれたが、その人は「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」と言った。これはどのような意味か。

c. 三人目は、一人目の者と同じように、自分から主に従うことを申し出たが、一人目と違って、自分の側の条件を出している。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」と。条件を出すことによって、自ら、主に従うということを取り消している。これは自己矛盾である。イエスはこの自己矛盾を比喩を用いてこう言った。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」と。

(3) イエスの弟子づくりの方法 注16

◆<弟子道の中心>は「わたしについて来なさい」と招いたイエスご自身を知るようになることである。イエスの弟子となることは、単なるひとつの訓練プログラムをこなすということではなく、イエスとの親しい個人的な関係なしには成り立たないものである。そのために、イエスは弟子たちと生活を共にし、その中でご自身を弟子たちに分かち与えた。同時に、弟子たち同士もお互いに自分の生活を分かち与えることを学んだ。人間関係というものは、共に、時を過ごし、お互いに親しく知り合って、はじめて発展し得るものである。
◆イエスは弟子たちを別々に召して訓練されたのではなく、グループとして召して訓練された。それは、同じ目的を持った者同士が交わりの中で励ましあって生きていく必要があるからである。
◆イエスは交わりを基礎にして弟子訓練をされた。そこでは、まず、交わりに与る者かみな、イエスとの関係を育むのと同時に、同じ交わりの中のひとりひとりとの関係をも育んでいくということである。弟子たちは指導者とだけでなく、グループのメンバーとも交わりをもつ必要がある。
◆そのグループは小さい。それは他のメンバーと密接な関係を持つためである。親しさを深めるためには、霊的、かつ精神的な力を要する。実際、１２人のグループが互いに親しく知り合うことが出来たのは、彼らが共に生活できるような小グループであったからである。主に従う者たちが、同じ心をもった人々と密接な交わりに生きるとき彼らの人生に神の目的を達成することが可能となる。
◆このように、弟子たちはすべてのことを主と共に過ごしながら学んでいった。イエスの取られた方法は少数の人間を弟子とし、そこから弟子の輪を広げていくことであった。その目指すところは、あらゆる国の人々を弟子とすることである。

注16 弟子の道の基礎となるような聖書的・神学的原則を解明した書物は多くはない。古典的なものでは、A・B・ブルースの『十二弟子の訓練』がある。しかし１９世紀末の著作であり、現代の教会のニーズにおいては論じていない。他の書物として、ロバート・E・コールマンの『伝道のマスター・プラン』がある。この書は主イエスが弟子を訓練された際の計画を分析し、弟子の道のプロセスに関する基礎的な原則を確認している。しかし、弟子の道に関する著作が、弟子の道の第一の目的が伝道にあることを示唆してきた。しかし、教会は、神の目的が単に伝道だけでなく、もっと広いものである。弟子のなすべきことは、まず何よりも教会を建て上げることにある。

12. ルカの福音書の神学的総括

＜はじめに＞
◆これまでルカの福音書の序説的事柄(No.1～13)を取り上げてきた。これらはルカの福音書をより詳しく読んでいくためのひとつの手引きであり、またひとつの視座を与えるものである。そのまとめとして今回は、ルカが人間をどのように見ていたのか、ルカは神(イエス)をどのように見ていたのか、そしてルカは救いをどのように見ていたのかをまとめてみたい。

(1) ルカの人間観

◆序説５「ルカの福音書の梗概と鍵語」―(2)鍵語―で取り上げたように、ルカの福音書の主題は「失われた人を捜して救う解放者イエス」である。ところで「失われた人」とはどのような者なのか。イエスが宣教開始された時にイザヤ書６１章が引用された。

> 「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々(打ちひしがれている者、圧迫されている人)を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」(ルカの福音書４章 18～19節)

◆この箇所には、＜貧しい人々＞＜捕らわれ人＞＜盲人＞＜しいたげられている人々＞という表現が見られる。本来、豊かな者であったものが貧しくなっている。本来価値あるものが、価値あるものだと思っていない。そしてだれからも愛されないと思っている。自由の身だと思っていたが、実は囚人であり捕らわれの身となっている。何もかも持っていると思っているが、実は大切なものは何ももっていない。自分は見えていると思っているが、実は盲目であり霊的な現実が見えないでいる。また、本来自由であるべきものが、しいたげられ抑圧されている・・という現実。
◆ルカが人間をどのように見ていたのかを、さらにルカの福音書の記事の中から見てみよう。

①＜貧しい人々＞
◆御使いたちがキリストの誕生を最初に知らせた羊飼いたちは貧しい人々であった（２章８節以下）。祝宴を催す時、金持ちや友人、親族ではなく、「貧しい人、不具の人、足なえ、盲人たち」を招くようにという指示まで与えられている（１４章１２節～１４節。２１節）。マリヤもその賛美で「飢えた者を良いもので満ち足らせ」と歌っている（１章５３節）。ルカの描くイエスは常に貧しい者と共にいるのである。
◆貧しさは経済的なことばかりではない。霊的生活や力、また、神が人間の生活のために与えた豊かさ、価値を失っていることでもある。例えば、放蕩息子が本来豊かな者であったが、今は落ちぶれた者となっている。

②＜捕らわれ人＞
◆これは、投獄されたり、忘れられたりした人々のことであるが、刑務所にいる人々だけでなく、自分の悪癖と間違った欲望に捕らわれている人々のことである。ルカの福音書の中には、マモン(富)に捕らえられる者たちの話が非常に多い。１２章の「愚かな金持ち」、１６章の「金持ちとラザロ」、１８章の「永遠のいのちを得ることができなかった金持ちの役人」、そして１９章のザアカイ・・等。
◆１９章のザアカイは「取税人のかしら」でありお金も地位もあった。しかし誰からも愛されない孤独な生活。「何もかもあって、大切なものがない」という現実、しかも取税人としてユダヤの社会から忌み嫌われ、疎外され、誰からも愛されない孤独な人生を送っている。現代もザアカイのような人々は大勢いる。食べる物は「ある」。着る物も「ある」、住む所も「ある」が、なにか

が「ない」のである。何が「ない」のであろうか。それは人間として最も必要な「交わりのいのち」である。このいのちの喪失こそ、人間性を失った人間の姿であり、ルカはそれを「失われた人」と見ている。

③<盲人>

◆肉体的に盲人である人もこの中に入るが、特に真理に対して盲目である人々に当てはめられる当時の宗教指導者たち、また群衆も、そしてイエスと共に歩んでいた弟子たちすらも盲目であった。

◆ルカの福音書１８章３５～４３節には、「目が見えるようになること」を求める盲人の叫びがある。この願いは主のみこころにかなった。肉体の目にもまさって、心の目、霊の目が開かれるようになることが重要であることをルカは示唆している。続くザアカイの話も霊の目が開かれることによって「きょう、救いがこの家に来ました」とイエスは宣言された。

◆ルカの福音書２４章２１節には、霊的な目が開かれていないために、失望落胆している人間の姿が描かれている。「この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていた」弟子たちが、イエスによって「目が開かれ」（３１節)るまで、彼らと共に歩き、聖書を説き明かされた者がイエスだと悟ることができなかったのである。見ているのに、見えていない。聞いているのに、聞こえていない。これが盲人の姿なのである。

④<しいたげられている人々>(打ちひしがれている人々、圧迫されている人々)

◆ルカ福音書１０章には「良きサマリヤ人」の話がある。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物を剥ぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った」というのである(１０章３０節)。思いがけない出来事に遭遇する。ところが本来助けてくれるはずの祭司や、レビ人は素通りしてしまった。助けを叫び求めるが、だれも助けてくれないという現実、あるはずのないことが起こって困惑しているが、だれも助けてくれない。放蕩息子の例でも、空腹になった時「だれひとり彼に与えようとはしなかった」とある(１５章１６節)。

◆ルカ福音書の１７章にはツァラアトに冒された人のことが出てくる。病気になって、しかも伝染性があると間違って考えられ、みんなに嫌われていた。家族からも社会からも隔離され、疎外されている現実があった。しいたげられている人々は現代にも溢れている。

(2) ルカの神観(キリスト観)

◆イエス・キリストはどのようにして失われた人を捜し出して救おうとされたのか、ということである。ルカはイエス・キリストをどのように描いているだろうか。

①良き隣人としてのイエス

◆「良きサマリヤ人」のところでは、サマリヤ人は見ず知らずの傷ついた旅人、強盗に遭って文無しになったこの旅人を「私が責任をもって支払いましょう」と言った。このサマリヤ人とはイエス・キリストのことである。つまり、この傷ついた旅人にとって、このイエス・キリストというお方が、「あなたのためには、私が全責任を負います」と言ってくださった。このサマリヤ人がいるかぎり、この旅人は心配がない。明日のことは心配がない。イエス・キリストというお方は、この見ず知らずの旅人に全責任を負ってくださる方である。だから、このお方のもとでは失望することはない。この旅人の支払うべき、この人のしなければならないことを、代わって支払って下さった隣人としてルカはイエスを描いている。

②失われた者を見つけるまでも探し出そうとするイエス

◆１５章の「いなくなった一匹の羊」のたとえと「なくした銀貨」のたとえに見られる、「見つけるまで捜す」という異常とも思える愛着(執着)。

③忍耐強く待ち続けているイエス(御父)

◆また、「放蕩息子」のたとえに見られるように、忍耐強く待ち続けている神の姿。そして息子の帰還を無条件で喜んでいる父親の姿がある。―そこには、なんら責めることばがなく、しもべに

向かって「さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪をはめさせ、はきものを履かせ、また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて祝おうではないか」と言って息子の帰還を心底喜んでいる。それほどにこの息子は父にとって価値ある存在であった。しかもそれを快く思わなかった兄息子に対しても、なだめる父親の姿がある。父にとっては兄も弟もいずれも尊い存在として公平な態度をとっている。
◆このように、ルカのイエス観は、「代わって支払いをし」「どこまでも探し出し、見つけるまで捜し」「忍耐強く待ち続け、帰還する息子の罪を非難することなく、むしろ子として歓迎する」救い主である。だれからも相手にされず、言葉もかけられないようなツァラアトに冒された人や取税人がイエス・キリストによって受け入れられている。罪人をまず赦し、受け入れて下さる救い主として、ルカはイエス・キリストを描いている。とはいえ、イエスは悪を是認しているのではない。イエス・キリストは、人間が罪を悔い改めて新しい人間になるためには、まず赦しの宣言がなされなければならないと言われた。まず受け入れ赦した時に、ザアカイは何と言ったか。「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧しい者に施します。また、もしだれかから不正な取立てをしていたら、それを四倍にして返します」と言っているのである。

(3) ルカの救済観

◆ルカは極めて明瞭に「救い」について描いている。ザアカイは「これからの生涯は、私の持っている物の半分は貧しい者に施します。だまし取った物(過去の償い)は、十分に償います。」というのである。今までは人をだましてきた。今後は人に与えていくという転換が起こった。新しい人生が始まった。それは人々に「与えていく人生」である。イエス・キリストによって受け入れられ赦されるときに、新しい人間に変えられるのである。「新しい人間」とは、過去の失敗、過去の罪を清算するばかりでなく、「四倍にして返していく」ような生き方が始まることを意味する。
◆だから「明日」が違ってくる。「明日」とは赦された後の生涯である。明日は開かれたものとなる。しかしその明日がどんな明日かはわからない。しかし人間らしい人間、喜びを味わうことのできる人間、人々から何かを与えられていくような人生である。放蕩息子の場合も、父親から受け入れられた息子は、家に無条件で息子として迎え入れられたことによって、それまで見えなかった父親の愛に気づかされ、父親との新しい生きた関係の中で生きる生涯に入った。
◆ルカの福音書には開かれた明日(未来)の無限の可能性を見ることができる。それは「目が開かれる」からである。心の目が開かれるときに、よみがえられた救い主イエスを「知り」(２４章３１節)、「心はうちに燃え」(同、３２節)、「喜びを抱き」(同、５２節)、「いつも宮にいて神をほめたたえ」(同、５３節)るようになる。そして神を愛し、人々を愛する新しい創造的な人生が開かれていく。まさに、「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深くしなさい」(ルカ６章３６節)ということばに代表されるように、御父の心をもって、様々なバリアを取り払い、人を(敵さえも)「愛し」、「善を行ない」、「祝福し」、「祈り」、「与え」、「貸し」、「赦し」ていく新しい明日を生きること。そして神と人との開かれた新しい関係を築くこと。これこそルカの救済観といえないだろうか。
◆また、その開かれた新しい関係を築いていく上でなくてはならない必要な良いものを御父はいつも求めるものにお与えになる。その良いものとは「聖霊」のことである。イエスはご自分の弟子たちにこの「聖霊」が注がれるまでは、都にとどまっていなさいと勧めている(ルカ２４章４９節)。なぜなら、聖霊が臨むときに、はじめてイエスの証人となるからである(使徒１章８節)。

ルカの福音書の学びのための設問

1. ルカの福音書における「神のあわれみ」について説明しなさい。

2. キリストの生涯における時代区分について説明しなさい。

3. イエスの時代におけるユダヤ人のパラダイム形成について述べ、四つの各グループ(サドカイ派、パリサイ派、エッセネ派、革命派)について説明しなさい。

4. ルカの福音書独自のたとえ話の中から、任意のものを二つ選び、そのたとえ話の中心的メッセージが何かを述べなさい。

5. ルカの福音書においては、個人が強調されているが、聖書における「ひとり子」の意味するところを述べなさい。

●旧約聖書の最後の声が発せられてから４世紀後、ユダヤの民は、またも強力な帝国の支配下にあった。ユダヤは課税と占領軍による厳しい支配のもとに統治される、ローマ世界の小さな領土だった。多くのユダヤ人は、ダビデのようなタイプの「メシヤ」（解放者）に期待して、圧政からの解放を待ち望んでいた。

●バプテスマのヨハネとイエスがその働きを始めるが、二人とも、武器をとるメシヤという、民衆が望んだメシヤ像にはふさわしくなかった。３年以内にヨハネは首をはねられ、イエスはローマの権力者の手に引き渡されて、十字架につけられた。しかし、イエスは死からよみがえった。彼こそが人々の思いをはるかに越えた意味において、待ち望まれていたメシヤであった。

図１　バプテスマのヨハネ

ヨハネは、人々に悔改めを勧め、ヨルダン川で

バプテスマを授けることによってその活動を始めた。

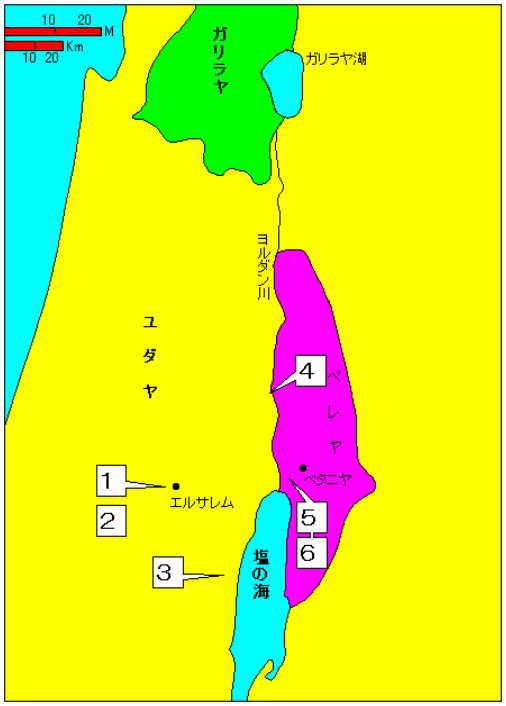
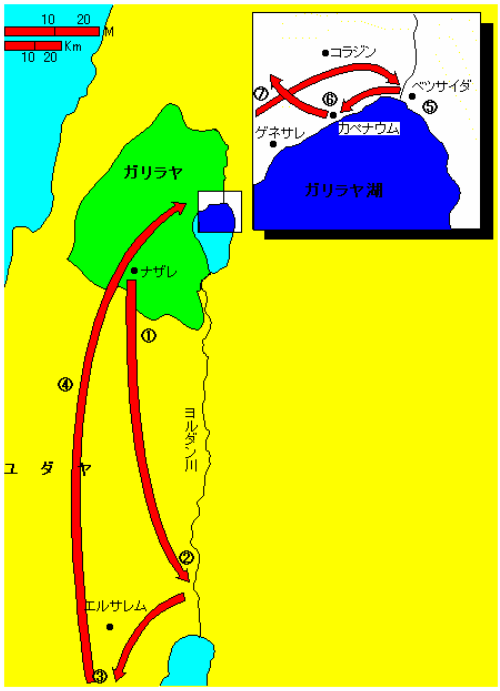


図２　イエスの宣教開始(ガリラヤ)

ナザレの大工イエスはヨハネによってバプテスマを受け、最初の弟子たちを召した。ガリラヤ伝道の主な活動の拠点はカペナウムである。最初の一年は民衆に支持されたが、あとの六ヶ月は痛烈な、冒涜的な攻撃を受けた。



●バプテスマのヨハネ

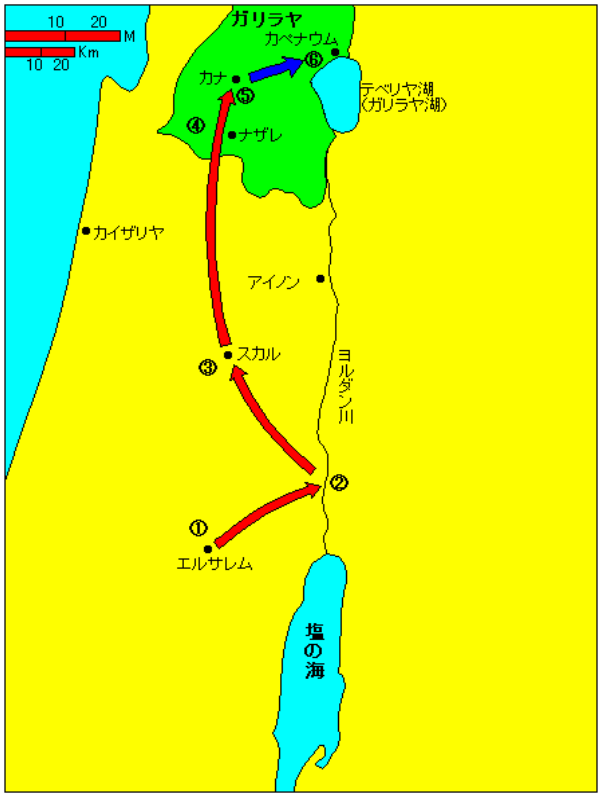
＜聖書箇所＞　ルカ／ヨハネ　＜解説＞

1．祭司ザカリヤは神殿で幻を見る。彼の妻エリサベツはヨハネを産み、彼はエリヤのような預言者となる、ということだった。（ルカ１：５－２５）
2．ヨハネの誕生。（ルカ１：５７－６６）
3．彼は、ユダヤの荒野で成長する。（ルカ１：８０）
4．３０代になってヨハネは荒野から召し出され、ヨルダンの谷で活動を始める。彼は、人々を悔い改めとバプテスマに招き、弟子を集めた。彼らは、祈り、断食をし、食物を分け、貧しい者に着物を着せ、ぶ

どう酒を飲まないことを教えられた。（ルカ３：１－１７）
5．ヨハネはヨルダン川の東のユダヤ人の権威者たちから尋問され、自分はメシヤではなく、その到来を告げる者である、と答える。（ヨハネ１：１９－２８）
6．ヨハネはイエスにバプテスマを授ける。（マタイ１：１３－１７）彼はイエスを「神の子羊」と呼ぶ。数人のヨハネの弟子がイエスに従った。（ヨハネ１：２９－４２

●イエスの宣教開始　＜聖書箇所＞　マルコ１：９－３９
＜解説＞
1．イエスは、故郷の町ガリラヤのナザレを去られた。
2．ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマを受けられる。
3．荒野に導かれ、そこで４０日間の試みを受けられた。
4．ヨハネが逮捕された後、イエスは北のガリラヤに行かれた。
5．挿入図
ベツサイダの近くで、イエスは、シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネを弟子として召された。
6．彼らは、シモンとアンデレの住むカペナウムに着いた。イエスは、みことばを語り、シモンのしゅうとめのいやしを含む、多くのいやしの業をされた。
7．そこから、イエスは初めてガリラヤ地方に出ていき、みことばを語り、悪霊を追い出された。
出来事の順序はマルコ１：９－３９による。

図３　初期の伝道



●北への旅(初期の伝道)＜聖書箇所＞　ヨハネ２：１３－４：５４
＜解説＞
1．イエスは、過越の祭りにエルサレムに行かれた。そこで多くの奇跡をなさり、人々はイエスを信じた。
2．イエスと弟子たちはユダヤに行き、そこでは弟子たちが人々にバプテスマを授けた。バプテスマのヨハネは、アイノンでバプテスマを授けていた。
3．イエスは、ガリラヤに戻る途中、サマリヤのスカルに足を止められた。そこの井戸のほとりで、１人の女と話し、そこに２日間、留まって教えられた。

4．イエスは、エルサレムでイエスを見た人々によって、ガリラヤで歓迎を受けた。
5．カナで、王室の役人が、２９キロ離れたカペナウムに来て彼の息子をいやしてくれるように願った。イエスは、息子は直る、と彼に告げた。
6．役人は、帰りの道で、息子が直ったことを告げるしもべたちに会った。
出来事の順序は、ヨハネ２：１３－４：５４による。

図４

イエスの異邦人の中での働き

イエスはおもにユダヤ人のために働いたが、
ユダヤ人以外の者の間でも働かれた。

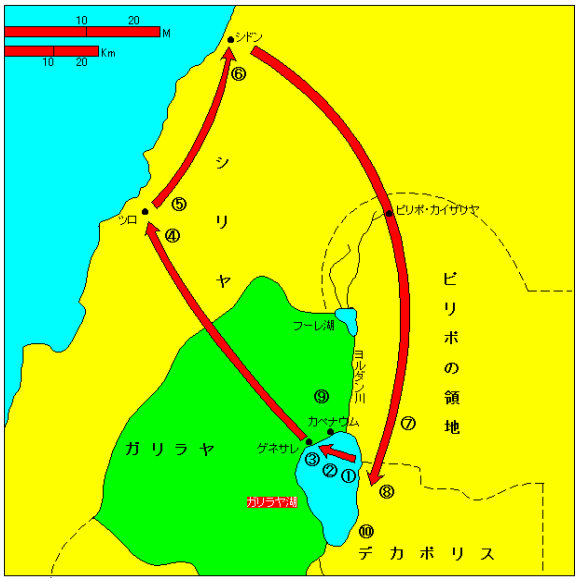
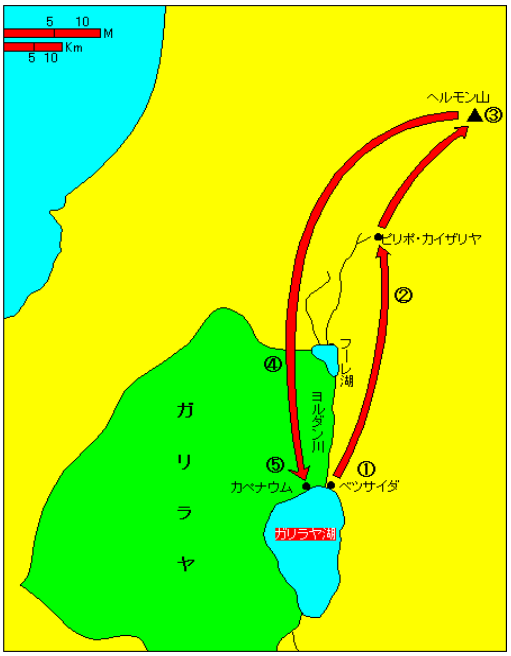


図５ ピリポ・カイザリヤ

わたしをだれと言うか？
イエスは人々の考えを調べた後、弟子たちに、
ご自身がだれかを判断するように求められた

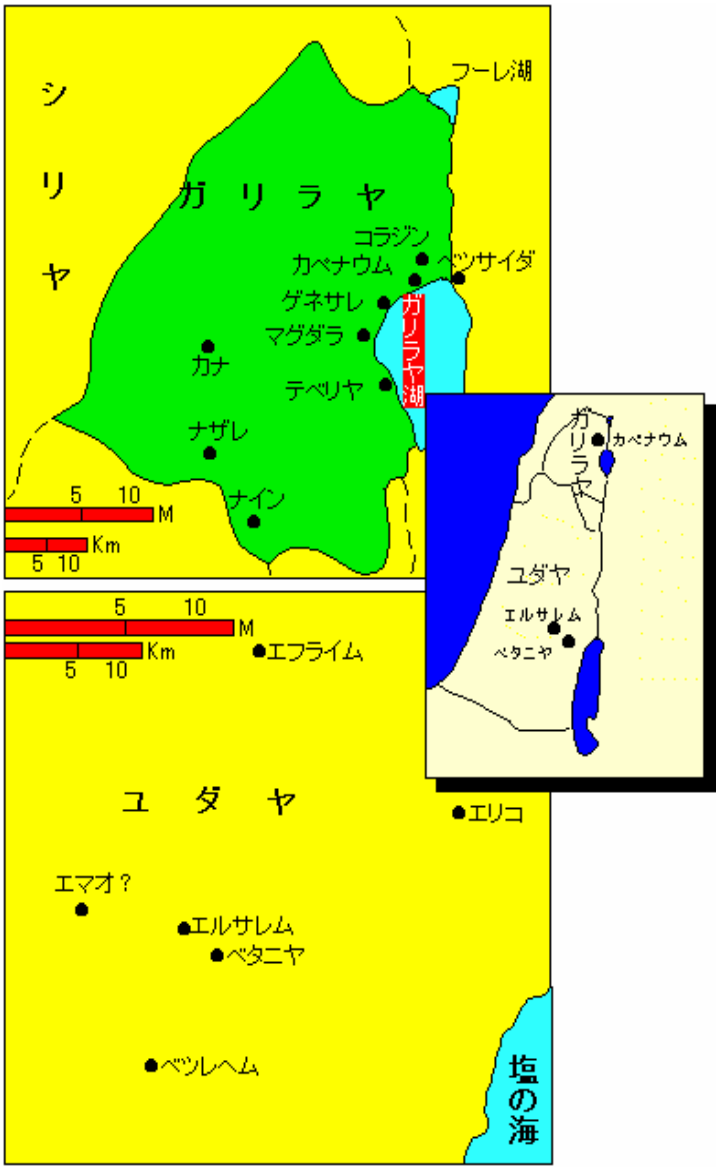


●異邦人の中での働き＜聖書箇所＞　マルコ６：４５－５６、７：２４－３７
＜解説＞
1．５０００人の給食の後、イエスは弟子たちを舟に乗せ、ベツサイダに行かせた。
2．向かい風が舟の進行を遅らせた。真夜中に、水の上を歩いて彼らのところに来られた。
3．進路を外れて、彼らはゲネサレに着いた。彼らは、しばらくそこに留まり、イエスは、その地方の多くの病人をいやされた。
4．イエスは、１人で、ツロの地方に行かれたのかもしれない。ひそかに滞在しようとされた。
5．異邦人の女が、娘から悪霊を追い出してくれるように願った。イエスはその願いを退けたが、彼女はしつこくすがりついた。イエスは、離れたところから娘を救った。
6．イエスは北のシドンに旅をされた。
7．イエスは、デカポリス（「１０の町」）の地方に下られた。イエスがみことばを語ったとか、どこかの町に入られたという記述はない。
8．そこでイエスは、耳が聞えず、口のきけない人をいやされた。奇跡行為者としてのイエスの評判は広まった。下記の２度の機会にも、イエスは異邦人の必要に応えられた。
9．イエスに絶対的な信頼を寄せたローマの百人隊長のしもべをいやされた。（ルカ７：１－１０）
１０．デカポリスで、男から、悪霊の群れを追い出された。（マルコ５：１－２０）

●わたしをだれと言うか？(゜リポ・カイザリヤ)<聖書箇所>　マルコ８：２２－９：３７
<解説>
1．イエスと弟子たちはベツサイダにいて、そこで盲人をいやされた。
2．彼らは、ピリポ・カイザリヤの周囲の地方に旅をした。イエスは、人々がご自身をだれと考えているかを、弟子たちに尋ねられた。ペテロは、イエスがメシヤであると信じる、と言った。イエスは、やがて訪れるご自身の死について弟子たちに話された。
3．６日後に、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネを連れて高い山（おそら<ヘルモン山であろう）に登り、そこで御姿を変えられた。その山のふもとで、イエスは少年から汚れた霊を追い出された。
4．イエスと弟子たちはガリラヤを通って旅をされた。イエスは、やがて来るご自身の死について話された。
5．カペナウムで、イエスは、いちばん偉い弟子になろうとする弟子たちの対抗心を戒められた。
出来事の順序は、マルコ８：２２－９：３７による。

カペナウムとベタニヤ

イエスと弟子たちは各地を巡り歩き、北の地方にも南の地方にも憩う家を見いだした。

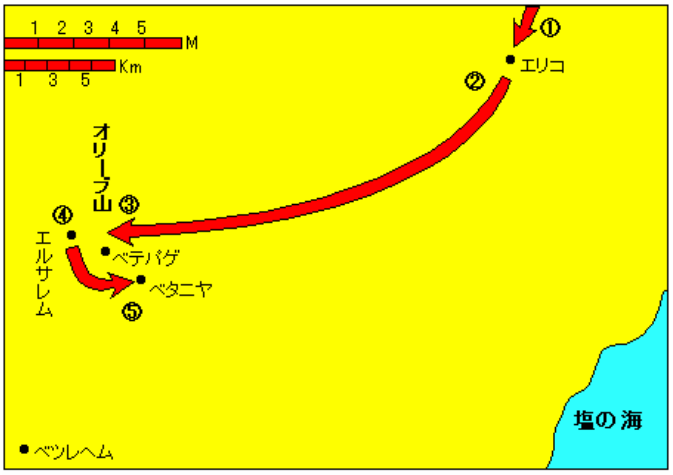


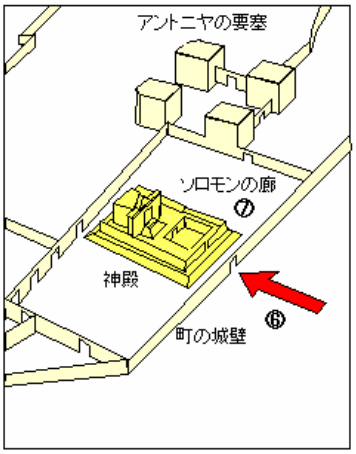
カペナウムとベタニヤ
＜解説＞
カペナウム
　初期の宣教において、ナザレで拒絶されてから、イエスはカペナウムに居を定められた。イエスはその町を拠点としてガリラヤ地方に出て行かれた。カペナウムでは、おそらく、シモンのしゅうとめをいやした場所である、シモンとアンデレの家に滞在されたのであろう。イエスはその町で多くの人々をいやすことによって、大群衆を引きつけられた。それで、カペナウムは、イエスの奇跡の場所として評判になった。（ルカ４：２３）イエスは後日、ご自身に応じなかったことで、カペナウムを責められた。（ルカ１０：１５）
ベタニヤ

図 ６　　イエスは、南の地方を訪れた時、ベタニヤに住むマリヤとマルタの姉妹に歓迎された。（ルカ１０：３８）ベタニヤは、南の地方でのイエスの家となった。最後にエルサレムを訪れた時にも、イエスはベタニヤに宿泊し、そこからいつもエルサレムに入られた。イエスは、その死の直前、ベタニヤで、おそらくマルタの妹マリヤによって、油をそそがれた。（マルコ１４：３－９）

エルサレムに入城するイエス

イエスは、裏切りを知りながら、最後のエルサレム入城をなされた。
英雄的な歓迎を受けたイエスは、盗みを働く商人たちを神殿から追い払われた。

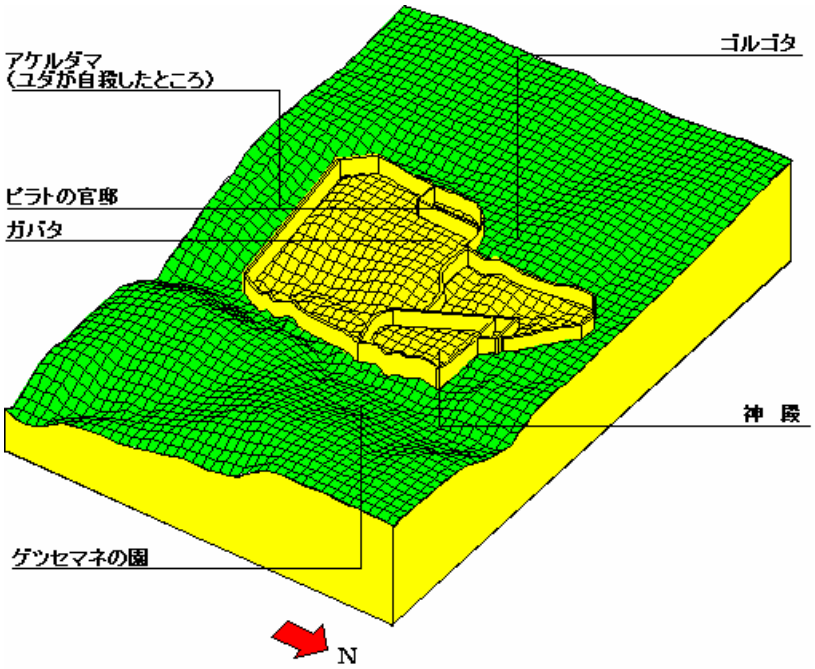




●エルサレムに入城するイエス ＜聖書箇所＞　マルコ１０：４６－１１：１９
＜解説＞
1．イエスと弟子たちは、エリコを通った（ルカは、そこでザアカイと会われたことを記している）。
2．エリコを出られるイエスに、大勢の群衆がついて行った。その途中で、盲人バルテマイをいやされた。
3．オリーブ山で、イエスは、前もって手配してあるろばを引いて来るために、２人の弟子たちを遣わした。
　ろばの所有者は、ベテパゲかベタニヤに住む人だった。
4．イエスはろばに乗ってエルサレムに入城された。群衆は、イエスをメシヤとして歓迎した。
5．彼らはベタニヤで夜を過ごした。
6．翌朝、彼らは、もう１度エルサレムに入った。
7．神殿のソロモンの廊で、イエスは不正な商人を追い払われた。
　出来事の順序は、マルコ１０：４６－１１：１９に

最後の２４時間

イエスは弟子たちと最後の食事をされ、裏切られ、逮捕され、
裁判にかけられた後に、ローマ人によって処刑された。



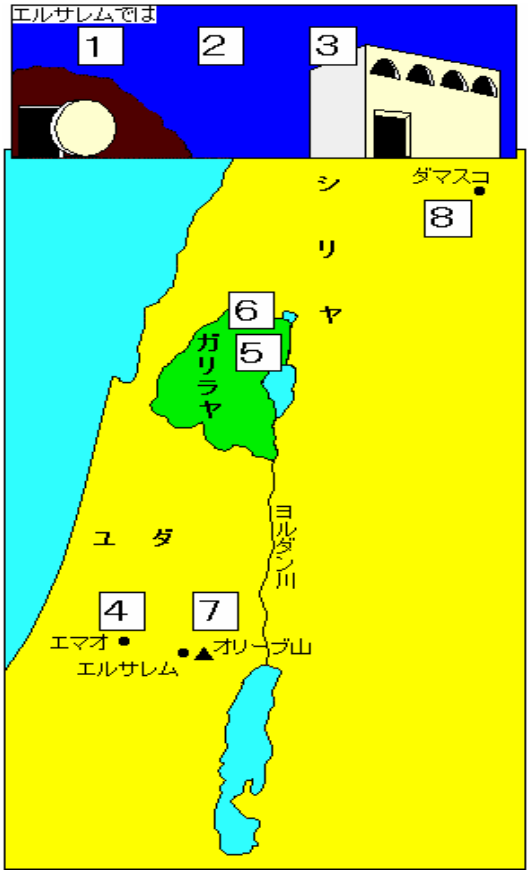
●最後の２４時間　＜解説＞

1．イエスと弟子たちは秘密の場所である２階の部屋で、過越の食事をした。（マルコ１４：１２－２６）
2．ユダはイエスを裏切るために、夜、そこを出ていく。（ヨハネ１３：２１－３０）
3．ゲツセマネでイエスは祈るが、弟子たちは眠ってしまった。（マルコ１４：３２－４２）
4．ユダは、イエスを捕えるために、ローマ兵と神殿の警備兵を案内して来た。弟子たちは逃げた。（マルコ１４：４３－５２）
5．イエスは、告発の理由を決定するために、アンナス（カヤパのしゅうと）の前に引き出された。（ヨハネ１８：１２－１４）
6．イエスはカヤパ（大祭司）とユダヤ議会の前に引き出された。証言は食い違い、イエスは質問に答えるのを拒否された。神を汚した罪で死刑判決がなされた。ペテロはイエスを否認した。（マルコ１４：５３－７２）
7．朝早く、ピラトの官邸に連れて行かれ、政治的な罪で告発された。ピラトは、イエスは無罪である、と

考えた。（ルカ２３：１－５）
8．ピラトは、イエスを、王宮のヘロデ・アンテパス（バプテスマのヨハネの首をはねた人物）のところに送った。イエスは答えることを拒否し、ヘロデと兵士たちは、イエスに、王の服装をさせた。（ルカ２３：６－１２）
9．ピラトは、イエスを釈放することを提案したが、群衆はバラバを選んだ。イエスは、官邸の外のガバタ（敷石）という場所で有罪の判決を受けられた。（ヨハネ１８：３８－１９：１６）
１０．ユダはそれを聞いて、裏切りの代価を祭司に返そうとした。
１１．ユダは自殺した。（マタイ２７：３－１０）
１２．兵士たちは、イエスをあざけった。（マタイ２７：２７－３１）
１３．「どくろ」という意味のゴルゴタで、イエスは十字架につけられた。（マタイ２７：３２－４４）

復活の証人たち

イエスの復活を信じる最初のクリスチャンたちの信仰は、
在世中のイエスを見たという、大勢の人々によって裏付けられた。

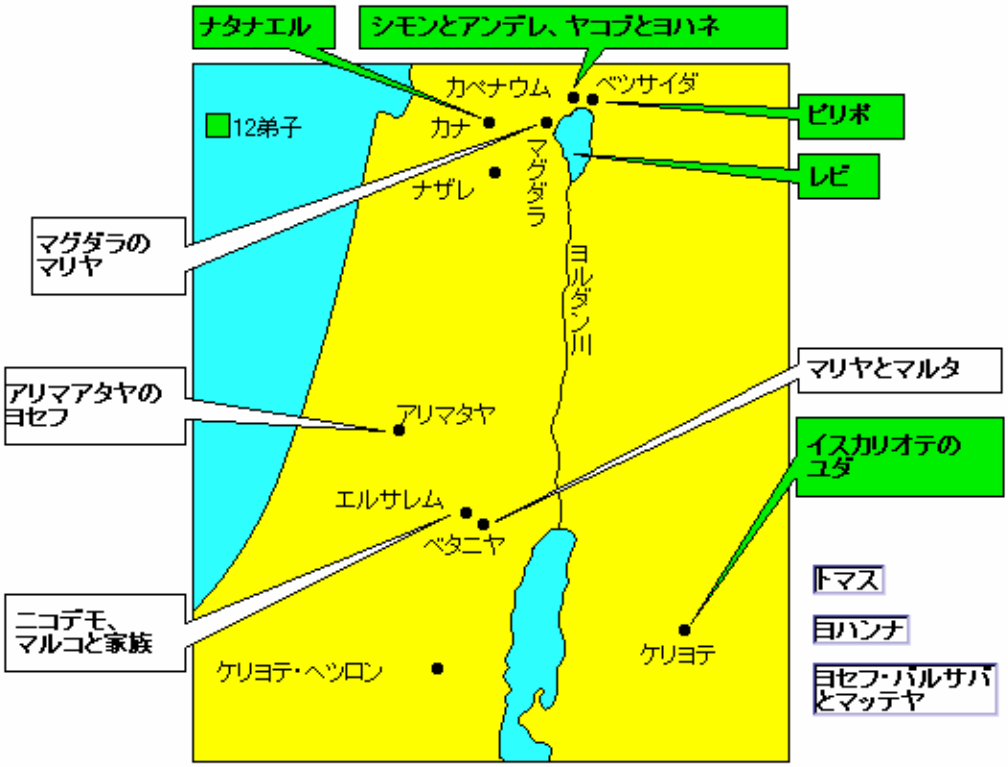


●復活の証人たち　＜解説＞
1．墓で、マグダラのマリヤ。（ヨハネ２０：１１－１８、マルコ１６：９－１１）
2．墓の近くで、マグダラのマリヤと「ほかのマリヤ」。（マタイ２８：９－１０）
3．２階の部屋で、弟子たちが食事をしている時。（マルコ１６：１４－１８）イエスは彼らにご自身に触れることを許し、また、魚を食された。（ルカ２４：３６－４９）戸が閉められた部屋にはトマスはいなかった。（ヨハネ２０：１９－２３）やがてトマスもイエスに会った。（ヨハネ２０：２４－２９）
4．エマオ途上で、クレオパともう１人の弟子。（ルカ２４：１３－３５，マルコ１６：１２－１３）

5．ガリラヤの山で、１１人の弟子。（マタイ２８：１６－２０）
6．テベリヤ湖畔（ガリラヤ湖）で、ペテロ、トマス、ナタナエル、ヤコブ、ヨハネ、ほかの２人の弟子。
イエスが料理した朝食を食べた。（ヨハネ２１：１－２２）
7．オリーブ山で、イエスは昇天された。（ルカ２４：５０－５１，使徒１：６－１１）
8．ダマスコ途上で、イエスは、サウロに現れた。（使徒９：１－９）
パウロは、１コリント１５：５－７で、イエスは、別々の機会に、ペテロ、ヤコブ（イエスの兄弟）、そして、「５００人以上の兄弟たちに同時に」現れた、と記している。
使徒１：３は、イエスが復活後、４０日間にわたって、多くの機会に現れたことを書き留めている。

イエスに従った人々

その活動の期間、多くの様々な男や女たちが、イエスに従った。



a. ナタナエル
（バルトロマイとしても知られる）カナの出身。ピリポによってイエスに導かれた。
（ヨハネ１：４５－５１）

b. シモンとアンデレ、
ベツサイダ出身だが、カペナウムに住んでいた。兄弟で協力して、漁業を営んでいた。
（マルコ１：１６－１８）

c. ヤコブとヨハネ
カペナウムの近くに住んでいた。かなり裕福な家の兄弟で、漁師をしていた。（マルコ１：１９，２０）

d. ピリポ
ベツサイダの出身。（ヨハネ１：４３，４４）

e. レビ（マタイとしても知られる）
ガリラヤ湖畔の収税所から、イエスによって召された。（マルコ２：１３－１７）

f. マグダラのマリヤ
マグダラの出身。イエスによって悪霊の支配から救われた。彼女やほかの女たちがイエスに従った。（ルカ８：１，２）

g. マリヤとマルタ
マルタはイエスを家に喜んで迎えた。この姉妹の兄弟ラザロは、後にイエスによって、死からよみがえった。（ルカ１０：３８－４２）

h. イスカリオテのユダ
イエスを裏切った。「イスカリオテ」は、おそらく、ケリヨテかケリヨテ・ヘツロンの出身であることを意味する。弟子たちの会計係であった。（ヨハネ１２：４－６）

i. アリマタヤのヨセフ
ユダヤ議会の議員で、イエスの隠れた弟子であった。（ルカ２３：５０－５４）

j. ニコデモ、マルコと家族
ニコデモ
夜、イエスに会うために来た。彼もイエスの隠れた弟子であった。（ヨハネ３：１－２１）
マルコと家族
ヨハネ・マルコは、最後の晩餐が行われた家の持ち主であったかもしれない。この家は、その最初期から、初代教会の集会場であった。（使徒１２：１２）

l. トマス
イエスの復活を疑った人物。
アルパヨの子ヤコブ、熱心党員シモン、ヤコブの子（タダイとしても知られる）は、十二弟子に任命された人々であった。（マルコ３：１８）

m. ヨハンナ
クーザ（ヘロデの宮廷の執事）の妻。彼女やスザンナは、ほかの女たちとともにイエスと弟子たちに従い、彼らを財政的に支えた。（ルカ８：３）

n. ヨセフ・バルサバとマッテヤ
二人とも、使徒１：１５－２６において、ユダに代わる使徒の候補者として記されている。彼らは、初めからイエスに従った人々だった。マッテヤが使徒に選ばれた。

福音書記事―対照表

No.	EVENT	PLACE	LK	MT	MK	JH
	１．　準備期間					
1	序　文		1：1～14			1：1～14 16～18
2	キリストの系図		3：23～38	1：1～17		
3	ヨハネ誕生の告知	エルサレム神殿	1：5～25			
4	マリヤへの告知	ナザレ	1：26～38			
5	ヨセフへの告知	ナザレ		1：18～23		
6	マリヤのエリザベツ訪問	ユダの町	1：39～56			
7	バプテスマのヨハネの誕生	ユダの町	1：57～58			
8	ヨハネの割礼と命名	ユダの町	1：59～80			
9	イエスの誕生	ベツレヘム	2：1～7			
10	羊飼いへの告知	ベツレヘム付近	2：8～14			
11	羊飼いの礼拝	ベツレヘム	2：15～20			
12	イエスの割礼	〃	2：21			
13	宮もうで シメオンとアンナの預言	エルサレム	2：22～38			
14	東方の博士たち	ベツレヘム		2：1～12		
15	エジプトへの逃避	ベツレヘム→エジプト		2：13～15		
16	ヘロデの幼児虐殺	ベツレヘム付近		2：16～18		
17	ナザレへの帰還	エジプト→ナザレへ	2：39～40	2：19～23		
18	１２歳のイエス	エルサレム	2：41～52			
20	イエスのバプテスマ	ヨルダン川	3：21～22	3：13～17	1：9～11	1：29～34
21	荒野での試み	ユダヤの荒野	4：1～13	4：1～11	1：12～13	
	２．　宣教の開始					
22	ヨハネ、アンデレ、 ペテロがイエスに出会う					1：35～42
23	ピリポとナタナエルの召命	ガリラヤへの道				1：43～51

No.	EVENT	PLACE	LK	MT	MK	JH
24	最初の奇蹟(カナの婚礼)	ガリラヤのカナ				2 : 1～11
25	カペナウム滞在	カペナウム				2 : 12
	３．　初期ユダヤ伝道					
26	最初の過越と宮きよめ	エルサレム				2 : 13～25
27	ニコデモとの会話	エルサレム				3 : 1～21
28	ユダヤ滞在	ユダヤ				3 : 22
29	イエスに対するヨハネのあかし	アイノン				3 : 23～36
30	ガリラヤへの出発	ユダヤからガリラヤへ				4 : 1～3
31	サマリヤの女とサマリヤ人の回心	スカル				4 : 4～42
	４．　ガリラヤ伝道(前期)					
32	ヨハネの投獄		3 : 19～20	14 : 3～5	6 : 17～20	
33	ガリラヤ伝道の開始	ガリラヤ	4 : 14～15	4 : 12～17	1 : 14～15	4 : 43～45
34	王室の役人の息子の癒し	ガリラヤのカナ				4 : 46～54
35	ナザレ人の排斥①	ナザレ	4 : 16～30			
36	奇跡的大漁と弟子の召命	ガリラヤ湖のほとり	5 : 1～11	4 : 18～22	1 : 16～20	
37	悪霊につかれた人の癒し	カペナウム	4 : 31～37		1 : 21～28	
38	ペテ口の姑の癒し	〃	4 : 38～39	8 : 14～15	1 : 29～31	
39	その日多くの人々の癒し	〃	4 : 40～41	8 : 16～17	1 : 32～34	
40	ガリラヤ巡回	ガリラヤ	4 : 42～44	4 : 23～25	1 : 35～39	
41	ツァラアトに冒された人の癒し		5 : 12～16	8 : 2～4	1 : 40～45	
42	中風の人の癒し	カペナウム	5 : 17～26	9 : 1～8	2 : 1～12	
43	マタイの召命と歓迎食卓		5 : 27～32	9 : 9～13	2 : 13～17	
44	二回目の過越、ベテスダ	エルサレム				5 : 1～47
45	安息日論争①		6 : 1～5	12 :1～8	2 : 23～28	
46	安息日論争②		6 : 6～10	12 : 9～13	3 : 1～5	
47	民衆の熱狂とイエスに対する陰謀		6 : 11, 17 ～ 19	12 : 14～21	3 : 6～12	

No.	EVENT	PLACE	LK	MT	MK	JH
48	十二弟子の選定		6 : 12～16	10 : 2～4	3 : 13～19	
49	山上の説教		6 : 20～49	5 : 1～8:1		
50	百人隊長のしもべの癒し	カペナウム	7 : 1～10	8 : 5～13		
51	ナインのやもめの息子のよみがえり	ナイン	7 : 11～17			
52	バプテスマのヨハネの質問		7 : 18～35	11 : 2～19		
53	罪深い女イエスの足に油を注ぐ 二人の負債者のたとえ		7 : 36～50			
54	弟子たちと共にガリラヤ伝道		8 : 1～3			
55	悪霊追放を巡る論争		11 : 14-15, 11 : 17-26	12 : 22～37	3 : 20～30	
56	しるしを求めること①		11 : 16, 29-36	11 : 16, 29～36		
57	イエスの母と兄弟		8 : 19-21, 11 : 27-28	12 : 46～50	3 : 1～35	
58	パリサイ人ののろい		11 : 37～54			
59	神に信頼することの教え		12 : 1～59			
60	ガリラヤ人の虐殺に関する教え		13 : 1～5			
61	天国に関するたとえ	ガリラヤ湖のほとり	8 : 4～18, 13 : 18～21	13 : 1～53	4 : 1～34	
62	イエスに従うとは	ガリラヤ湖の近く	9 : 57～62	8 : 18～22		
63	嵐を静める	ガリラヤ湖	8 : 22～25	8 : 23～27	4 : 35～41	
64	ゲラサの悪霊につかれた男の癒し	ゲラサ	8 : 26～39	8 : 28～34	5 : 1～20	
65	断食に関する議論		5 : 33～39	9 : 14～17	2 : 18～22	
66	ヤイロの娘のよみがえり 長血の女のいやし		8 : 40～56	9 : 18～26	5 : 21～43	
67	二人の盲人のいやし			9 : 27～31		
68	悪霊につかれてロのきけない人のいやし			9 : 32～34		
69	ナザレ人の排斥②			13 : 54～58	6 : 1～6	
70	十二弟子の派遣		9 : 1～6	9 : 35～10:1 10 : 5～11:1	6 : 7～13	
71	バプテマスのヨハネの死		9 : 7～9	14 : 1～2, 14 : 6～12	6 : 14～16 6 : 21～29	

No.	EVENT	PLACE	LK	MT	MK	JH
72	五千人の給食の奇蹟	ガリラヤ湖のほとり	9：10～17	14：13～21	6：30～44	6：1～14
73	イエス水の上を歩く	ガリラヤ湖		14：22～33	6：45～52	6：15～21
74	ゲネサレでの歓迎	ゲネサレ		14：34～36	6：53～56	
75	いのちのパンの教え 三回目の過越の祭り	カペナウム				6：22～71
76	言い伝えに関する議論			15：1～20	7：1～23	
	5．ガリラヤ伝道(後期)					
77	スロ・フェニキヤの女の娘の癒し	ツロとシドンの地方		15：21～28	7：24～30	
78	耳が聞こえず口のきけない人のいやし	デカポリス		15：29～31	7：31～37	
79	四千人の給食の奇蹟	〃		7：31～37	8：1～9	
80	しるしを求めること②	マガダン地方/ダルマヌタ地方		15：39 ～ 16：4	8：10～13	
81	パリサイ人のパン種への警告	ガリラヤ湖		16：5～12	8：14～21	
82	盲人の癒し	ベツサイダ			8：22～26	
83	ペテロのキリスト告白	ピリポ・カイザリヤ	9：18～21	16：13～20	8：27～30	
84	キリストの死と復活の予告①		9：22～27	16：21～28	8：31～ 9：1	
85	山上の変貌		9：28～36	17：1～13	9：2～13	
86	悪霊につかれた(ひとり)子のいやし		9：37～43	17：14～20	9：14～29	
87	キリストの死と復活の予告②	ガリラヤ	9：43～45	17：22～23	9：30～32	
88	宮の納入金	カペナウム		17：24～27		
89	誰が一番偉いか、その他	〃	9：46～50	18：1～35	9：33～50	
	6．後期ユダヤ―ベレヤ伝道(エルサレムへの道)					
90	ガリラヤからユダヤへ	ガリラヤからユダヤへ	9：51～56	19：1～2	10：1	
91	７０人の派遣		10：1～12 10：16～20			
92	悔い改めない町々		10：13～15	11：20～24		
93	仮庵の祭り	ガリラヤ エルサレム				7：1～52

No.	EVENT	PLACE	LK	MT	MK	JH
94	姦淫の女	エルサレム				7 : 53～8:11
95	祭りの間の宮での教え	〃				8 : 12～59
96	イエスの招き		10 : 21～24	11 : 25～30		
97	良いサマリヤ人のたとえ		10 : 25～37			
98	ベタニヤのマルタとマリヤ	ベタニヤ	10 : 38～42			
99	祈りについての教え		11 : 1～13			
100	生まれつきの盲人の癒し	エルサレム				9 : 1～41
101	宮きよめの祭り、 羊の門のたとえ	〃				10 : 1～39
102	ペレヤ伝道	ヨルダン川向う				10 : 40～42
103	実のないいちじくのたとえ		13 : 6～9			
104	18 年間病の霊につかれていた女の癒し		13 : 10～17			
105	締め出される者、 神に捨てられるエルサレム	エルサレムへの道	13 : 22～35	23 : 37～39		
106	水腫をわずらった人の いやし、大宴会のたとえ		14 : 1～24			
107	真の弟子の資格		14 : 25～35			
108	失った羊、銀貨、放蕩息子のたとえ		15 : 1～32			
109	不正な管理人のたとえ		16 : 1～13			
110	金持とラザロのたとえ		16 : 14～31			
111	つまずき、赦し、信仰、 謙遜に関する教え		17 : 1～10			
112	10 人のツァラアト人の癒し	サマリヤ・ガリラヤの境	17 : 11～19			
113	神の国の到来について		17 : 20～37			
114	祈りに関するたとえ① 願い求め続けたやもめ		18 : 1～8			
115	祈りに関するたとえ② 取税人とパリサイ人		18 : 9～14			
116	ラザロの復活	ベタニヤ				11 : 1～46
117	カヤパの勧告、イエス、 エフライムへ赴く	エルサレム エフライム				11 : 47～54
118	離婚に関する教え	ヨルダン東側のユダヤ		19 : 3～12	10 : 2～12	

No.	EVENT	PLACE	LK	MT	MK	JH
119	幼子の祝福	ヨルダン東側のユダヤ	18 : 15～17	19 : 13～15	10 : 13～16	
120	金持ちの青年への教え 弟子の報酬	〃	18 : 18～30	19 : 16～30	10 : 17～31	
121	ぶどう園の労働者のたとえ	〃		20 : 1～16		
122	キリストの死と復活の予告③	エルサレム途上	18 : 31～34	20 :17～19	10 : 32～34	
123	ヤコブとヨハネの願い	〃		20 : 20～28	10 : 35～45	
124	盲人の癒し	エリコ近郊	10 : 35～45	20 : 29～34	10 : 46～52	
125	ザアカイの回心	エリコ	19 : 1～10			
126	ミナのたとえ	〃	19 : 11～28			
127	ベテニヤ到着	ベタニヤ				11 : 55～12:1
	7.　最後の一週間					
128	マリヤの香油の注ぎ	ベタニヤ		26 : 6～13	14 : 3～9	12 : 2～11
129	エルサレム入場	ベタハゲ ベタニヤ エルサレム	19 : 29～44	21 : 1～11	11 : 1～11	12 : 12～19
130	イエスの宮清めと教え	エルサレム ベタニヤ	19 : 45～48 21 : 37～38	21 : 12～17	11 : 15～19	
131	実のないいちじくの木	ベタニヤからエルサレムへの道		21 : 18～22	11 : 12～14, 11 : 20～25(26)	
132	イエスの権威	エルサレム	20 : 1～8	21 : 23～27	11 : 27～33	
133	二人の子のたとえ	〃		21 : 28～32		
134	悪い農夫のたとえ	〃	20 : 9～19	21 : 33～46	12 : 1～12	
135	王子の結婚のたとえ	〃		22 : 1～14		
136	カイザルの税金について	〃	20 : 20～26	22 : 15～22	12 : 13～17	
137	復活について	〃	20 : 27～40	22 : 23～33	12 : 18～27	
138	一番大切な戒め	〃		22 : 34～40	12 : 28～34	
139	ダビデの主、キリスト	〃	20 : 41～44	22 : 41～46	12 : 35～37	
140	律法学者とパリサイ人への警告	〃	20 : 45～47	23 : 1～36	12 : 38～40	
141	やもめのレプタ献金	〃	21 : 1～4		12 : 41～44	
142	ギリシャ人の訪問と最後の教え	〃				12 : 20～50

No.	EVENT	PLACE	LK	MT	MK	JH
143	神殿の崩壊と終末の預言 再臨に関するたとえ	オリーブ山	21 : 5～36	24 : 1～25:46	13 : 1～37	
144	指導者たちの陰謀と ユダの裏切り	エルサレム	22 : 1～6	26 : 1～5, 26 : 14～16	14 : 1～2 14 :10～11	
145	過越の準備	〃	22 : 7～13	26 : 17～19	14 : 12～16	
146	最後の晩餐	エルサレム 二階の広間	22 : 14～18	26 : 20	14 : 17	
147	誰が一番偉いか	〃	22 : 24～30			
148	弟子たちの足を洗う イエス	〃				13 : 1-20
149	ユダの裏切りの告知	〃	22 : 21～23	26 : 21～25	14 : 18～21	13 : 21～30
150	主の晩餐	〃	22 : 19～20	26 : 26～29	14 : 22～25	
151	ペテロのつまずきの 予告	オリーブ山	22 : 31～38	26 : 30～35	14 : 26～31	13 : 36～38
152	最後教えと祈り	エルサレム 二階の広間				13 : 31～35 14:1～ 17:26
153	ゲッセマネの祈り	ゲッセマネ	22 : 39～6	26 : 36～46	14 : 32～42	18 : 1
154	イエスの逮捕	〃	22 : 47～53	26 : 47～56	14 : 43～52	18 : 2～12
155	アンナスの前での予審、 エルサレム大祭司官邸	エルサレム 大祭司官邸				18 :13～14, 18 :19～24
156	カヤパの前での裁判と イエスへの嘲弄	〃	22 : 63～65	26 : 57, 26 : 59～68	14 : 53 14 : 55～65	
157	ペテロの否認	〃	22 : 54～62	26 : 58, 26 : 69～75	14 : 54 14 :66～72	18 : 15～18 18 : 25～27
158	サンヘドリンによる 最後の断罪	〃	22 : 66～71	27 : 1	15 : 1	
159	ピラトの審問と釈放の ための努力①	エルサレム の総督官邸	23 : 1～5	27 : 2, 27 : 11～14	15 : 2～5	18 : 28～38
160	ヘロデの前のイエス	エルサレム	23 : 6～12			
161	ピラトの釈放の努力② ユダヤ人、バラバの釈放を 要求	エルサレム の総督官邸	23 : 13～23	27 : 15～25	15 : 6～14	18 : 39～40
162	ピラト、イエスの 十字架刑を決定、 兵士のあざけり		23 : 24～25	27 : 6～30	15 : 15～19	19 : 1～3
163	ピラトの釈放の努力③	エルサレム				19 : 4～16
164	ユダの自殺	〃		27 : 3～10		
165	ゴルゴタへの道	〃	23 : 26～32	27 : 31～34	15 : 23	19 : 17

No.	EVENT	PLACE	LK	MT	MK	JH
166	十字架につけられる イエス	〃	23 : 33～34 23 : 38	27 : 35～38	15 : 24～ 27 (28)	19 : 18～24
167	十字架のもとでの 出来事	〃	23 ： 35 ～ 37, 23 : 39～44	27 : 39～49	15 : 29～36	19 : 25～29
168	イエスの死	〃	23 : 46	27 : 50	15 : 37	19 ： 30
169	イエスの死に伴う 出来事	エルサレム とその近く	23 : 45 23 : 47～49	27 : 51～56	15 : 38～41	
170	イエスの埋葬	〃	23:50～56	27 : 57～61	15 : 42～47	19 : 31～42
171	.墓の番兵	〃		27 : 62～66		
	８．復　活					
172	女たちへの顕現	エルサレム とその近く	24 : 1～11	28 : 1～10	16 : 1～8	
173	マグダラのマリヤへの 顕現、ペテロとヨハネ	〃	24 : 1～12		16 : 9～11	20 : 1～18
174	番兵の報告	〃		28 : 1～15		
175	エマオ途上の２人の 弟子への顕現		24 : 13～35		16 : 12～13	
176	10 人の弟子への(トマ ス不在)顕現	エルサレム	24 : 36～49		16 : 14	20 : 19～25
177	トマスを含む１１人の 弟子への顕現					20 : 26～29
178	ペテロと愛された弟子 を含む7人への顕現	ガリラヤ湖				21 : 1～23
179	宣教の大命令	ガリラヤの 山		28 : 16～20	16 : 15～18	
180	昇天(使 1 : 1～11)	ベタニヤ	24 : 50～53		16 : 19～20	
181	ヨハネの結語					20 : 30～31 21 : 24～25